

九条本『諒闇部類記』翻刻(二)

神戸航介
鈴木蒼

(解題)

一

本稿は七三号に続き、当部所蔵の九条本『諒闇部類記』(函架番号九一五二五二)の翻刻を行うものである。本書の書誌や翻刻の凡例等、また識語①③の翻刻は七三号を参照していただきたい。なお、本号の解題は「一」を神戸航介、「二」を鈴木蒼が執筆し、翻刻は鈴木が作成した原稿をもとに両者で校正した。

本書所収記録のうち、本号では後半の冷相記・山槐記・実冬卿記の翻刻を行う。まず冷相記は、西園寺公相(一一三三―六七)の日記で、「今出川相国記」の名で知られる。日次記は伝存せず、正元元年御即位記(東山御文庫勅封一四一―三三)や、当部図書寮文庫所蔵伏見宮本『御産部類記』一六(伏一六一八)および『公相公記』(後深草天皇御琵琶始事、伏一九四〇)などにより逸文が知られる。『諒闇部類記』所収の仁治三年(一一四二)二月記は四条天皇崩御に関する記録であるが、本書以外では知られない記文であ

る。なお七三号で触れたように、冷相記の後に識語①があり、ここまですと「諒闇部類記」で、甘露寺親長自筆本を九条兼孝が書写したものである。

記主公相は仁治三年当時権大納言、正二位、二十歳。四条天皇は同年正月九日、閑院において十二歳で崩御した。不慮の崩御につき後継者が定まらず、鎌倉幕府との調整を経て後嵯峨天皇が踐祚したのは正月二十日となり、正月二十五日に泉涌寺において葬送が行われている。既知の史料では『後中記』『経光卿記抄』『平戸記』および当部図書寮文庫所蔵壬生本『四条天皇御葬送間之事』(壬一四五五)により、崩御およびその後の諸儀の様子が知られる。本書所収の冷相記は、すでに葬送が終了した二月の記録で、十五日の五七日法会や二十六日の七僧法会(七々日に行うべきところの代替)のほか、素服用用に関する記事が多く含まれている。特に三十日条には、この日下された除服宣言の書様と、川原において修禊し素服を切り川に流すという作法が行われたことが記されている。

次に山槐記は、建久三年(一一九二)三月十三日条から翌四年三月十五日条までが断続的に載せられている。建久三・四年の山槐記日次記は現存せず、次節で触れる二箇所以外は新出の逸文である。七三号で触れたように、この

山槐記は「中院重相」(中院通秀か)所持本を文明三年(一四七一)に甘露寺親長が書写したものを親本とするが、末尾に「自余条々非諒闇沙汰、仍不抄之」とあることから、甘露寺親長が書写した中院家蔵本は、山槐記から後白河天皇崩御にともなう諒闇関連の記事を抄出したものだったと考えておきたい。

記主中山忠親は、建久三年当時内大臣、六十二歳。保元三年(一一五八)に讓位し上皇となった後白河天皇は、建久三年三月十三日に六条殿において崩御した。後白河天皇の崩御および一連の諸儀については、『玉葉』『明月記』『心記(定能卿記)』があるが、山槐記はさらに詳細な情報を有している。これらにより一連の諸儀について整理すると、以下のようになる。

三月十三日 崩御。死の間際に五色糸を持ち、西を向き念仏を唱えるという臨終作法を行ったことが知られる。同日中に院号定・遺詔奏・入棺がある。山槐記記事により、各参加者および九条兼実がどの院号を推していたかわかる。また、今上後鳥羽天皇は孫にあたるため諒闇の有無につき議論があったが、後鳥羽天皇が劍璽なく踐祚した際に後白河上皇が伝国宣命を発したという関係から、特に諒闇ありとされた。

三月十五日 葬送。遺詔によりこの日となる。長講堂において法会が行われた後、遺体は六条殿から蓮華王院東法華堂に「平生之儀」をもって移送された。葬法は土葬である。

三月十九日 初七日。長講堂において法会が行われた。その様子について山槐記は詳細であり、指図を載せる点も重要である。同日に初七日御誦經使が発遣されている。これらは七日ごとと同様に行われる。また、後鳥羽天皇の倚廬渡御があり、内裏より素服支給を受けた者のリストが山槐記に記され

ている。なお、最近山下洋平の研究(『平安時代における臣下服喪儀礼』)日本古代国家の喪礼受容と王権』汲古書院、二〇二四年、初出二〇一〇年)により、この時期の臣下服喪は、天皇の服喪に従服する形のもと、故院の旧臣等が故院のために行う服喪とが制度として確立していたことが明確になった。院側の素服支給については前日の十八日に行われている。

四月二日 後鳥羽天皇が倚廬より本殿に還御する儀がある。また、天皇が錫紵から諒闇服に着替えるのに対応し、内裏側臣下に諒闇服の着用を命じる椽宣旨が下される。なお、院側は五月十四日に除服宣旨が下されたことが『心記』により知られる。

主要な諸儀は以上のとおりであるが、本書所収の山槐記には、翌四年三月十五日に行われた諒闇終わりの大祓までの間、諒闇中の年中行事への対応など、諒闇に関わる記事が細かく抄出されている。また、『玉葉』に詳しいが、蓮華王院宝蔵の出納や処分帳の処理など後白河天皇の遺産分与に関わる記事が注目される。当該期の葬送儀礼を考える上で、今後の研究の基本史料となるだろう。

次に実冬卿記は、滋野井実冬(一二四三―一三〇三)の日記である。『国書総目録』によれば、伝本は弘安八年(一二八五)の北山准后九十賀記(古写本は伏見宮本、伏一四〇一)があるのみで、他に所見がない。

本書は後嵯峨天皇崩御にともなう文永九年(一二七二)二月三十日龜山天皇倚廬渡御の記録である。滋野井実冬は当時右中将藏人頭、三十歳。後嵯峨天皇は寛元四年(一二四六)に讓位、文永九年二月十七日に寿量院において崩御した。崩御に関する一連の諸儀については『師守記』貞治三年(一二三六四)八月六日条裏書の勘例のほか、九条本『凶事式并代々儀』(九一六三

三、皇室制度調査室「皇室制度史料編纂ノート(二)」『書陵部紀要』七五号、二〇二四年に該当箇所の翻刻あり)に記事があるが、各種儀制に関する情報は少ない。ゆえに本書所収記事は貴重な史料となる。このときは「皇后宮御方西対」を倚廬としたことがわかり、また素服を支給する場面が記されている点は興味深い。

なお、識語②・③に続き、官司名等の訓読や、「御外祖父」「追号天皇」等の覚書が記されている。これらは諒闇部類記・諒闇記の本文ではなく、その性格は判然としないが、参考として翻刻を付した。

二

七三号でも述べたように、本資料はほぼ全てが未知の記文からなるが、ごく一部には学界既知の部分も存在する。本資料の性格を知る参考にもなるので、それについて記しておきたい。併せて、写本としての特徴も述べる。

既知の部分は二箇所あり、共に本稿で紹介する後半の山槐記中である。一箇所目は、建久三年四月十九日条の四行目「有平座政云々」から同日条の末尾までである。いわゆる陣申文に関する記述となるが、この部分は『洞院家廿卷部類』に「政始事」の一部として収載されており、史料大成本山槐記・『大日本史料』第四編之四に翻刻されている(ただし『大日本史料』は、水戸藩が編纂した史料集『進献記録抄纂』を底本にしている。同集は恐らく『洞院家廿卷部類』からの引用)。この「政始事」は、現在陽明文庫が所蔵する『政部類記』三卷(十五函文書第十五函二十二、二十四号)がその原資料である(石田実洋ほか『山槐記』古写本の解題と翻刻)(『東京大学史料編纂所研究紀要』二七号、二〇一七年)。こちらは奥書によれば、文安二年

(一四四五)九月に洞院実熙が編纂した山槐記の部類記である。

『政部類記』と本資料を比較すると、本資料では十九日条の大半を占める平座政の部分が大幅に省略されている(その部分は省略符「ー」あり)。また、『政部類記』には十六日条・十七日条の平座政開催に関する記述も若干含まれるが、本資料には含まれない(こちらは省略符もなし)。いずれも諒闇に関わらないため、抄出の際に省かれたとみられる。一方で本資料十六日条・十九日条冒頭から「懸簾如例」までの記述は『政部類記』に含まれない。部類記に抄出される前の原日次記は、本資料や『政部類記』で確認できる部分以外にも、多くの記述を含んでいたことが窺われる。また、本資料には文字の誤写が数箇所存在するほか、「依嘉承例」とある部分では、以下に「有出立、永万、定房無出立、安元、実綱依所劣不着南所、無出立、寿永」と続くはずの語句が抜けている。『政部類記』の方が写本の文字状態はよいといえる。

もう一箇所は建久三年十一月二十日条、建久四年正月二十六日条・二十八日条である。建久四年の春除目開催に関する記述であり、この部分は山槐記『除目部類』に同文が収められ、史料大成本山槐記・『大日本史料』第四編之十七に翻刻されている。『除目部類』は、新写本としては東京大学史料編纂所および東京大学総合図書館所蔵野宮本(『大日本史料』の底本。同所請求記号四一五七一〇一『除目部類』の一・二冊目および同館請求記号G二七・七三二『山槐記除目部類(第三)』の全三冊)・当部所蔵柳原本(函架番号柳・四一三『山槐記除目部類(二冊)』がある。加えて、後半の一部を書写した古写本が立命館大学図書館西園寺文庫に所蔵されており(請求記号SB二一〇・〇九七/〇三一『除目部類記 山槐記』)、その部分には当該部も含

まれる。

前掲した石田ほか論文によれば、山槐記『除目部類』は、元々花山院師継が編纂した部類記であり、西園寺文庫の古写本は甘露寺親長が明応三年（一四九四）三条西実隆所持本を書写したもので、柳原本も実隆所持本の写本（あるいはその系統の写本）であるという。私見では、野宮本も柳原本と同様の写本である。そのため、中院通秀より書写したらしき本資料と『除目部類』とで写本系統は異なるが、共に甘露寺親長が所持していたという点では近い関係にある。

『除目部類記 山槐記』と本資料の該当部を比較すると、本資料の方は誤字がまま見られるほか、一つ書の「一」の位置を誤るなど、概して前者の方が良質な本文と言えそうである。その他、誤りとは明確に判断できないが、本資料で割書となっている記述が、『除目部類記 山槐記』では本文として記されるなど、体裁に若干の相違がある。

これらの点を踏まえつつ本資料の全体を見ると、前述した箇所も含め、本資料には単純な誤字脱字と思われる部分が散見する。しかも、部類記所収の記録間で誤脱に顕著な偏差はないため、誤脱は甘露寺親長が書写した中院通秀所持本や四条隆量所持本の段階で存在していたのではない。同じ甘露寺親長書写本の『除目部類記 山槐記』の書写精度を踏まえると、親長の書写段階で生じた可能性も低い。つまり、これらは九条兼孝が書写した段階で発生したと考えられる。本資料における兼孝の書写態度は、必ずしも厳密ではなかったようである。抄出・省略が多いことも含め、本資料を利用するにあたっては、一定の注意が求められよう。

また、本資料には、全体に頭注によって記事の見出しが付されている。こ

れは親長自筆本あるいは兼孝の書写段階で生じたもので、少なくとも部類記の原資料には存在していなかったと思われる（どちらかといえば兼孝書写段階の可能性が高いか）。この点に加え、煩雑になることもあり、翻刻に見出しは含めなかった。なお、冊子中には兼孝、もしくは後世の九条家の人物によると思われる付箋の断片が数枚挟み込まれている。中には「定能卿記」・「剣事」・「十四」など、文字が書かれ見出しやメモの役割を果たしたと思われるものもあるが、こちらも翻刻には含めていない。本資料は近年、東京大学史料編纂所データベースHi-CATPlus（書陵部所蔵資料目録・画像公開システムにもリンクあり）により画像が公開されたので、以上の点は適宜画像を参照していただければ幸いである。

このほか、本資料には一部の文字にカタカナで訓が付されている。これらは訓が特殊であるか、筆写の際に文字を書き損なう等、対象の文字がやや判読しづらいものになった時に付されている。兼孝段階での補筆と考えてよいであろう。こちらは翻刻に反映している。

（翻刻）

冷相記 冷泉相国
公相公記

（西園寺公相）

仁治三年二月五日、天晴、予始參内、束帯・蒔絵剣・無文帯等如例、於鬼間
謁女房退出、

六日、今夜家君令着素服給、御直衣、黒色、両面同色、御奴袴、如御直衣、御衣、
白平絹、白御単、平絹、下御袴、普通御直衣切也、御冠、卷纒、於弘廂令着之給、
裏張、御扇、不置、御車八葉、行康法、榻、黒金、鞞、赤、前駟二人、衣冠、衛府長、佐伯国文、着
師車也、薄

青、白裏、凡黃香・木賊・薄、素服可儲門前之由、今朝召仰了、可令着素服給吉
方被尋陰陽在盛之處、他行云々、仍當時無憚方西面也、仍可為彼方有仰令出
給畢、

十四日、天晴、今日五七日也、未明御懺法、次每日御經供養、次七日御仏事、
有有七ヶ寺御誦經、無人之由有催、已剋參旧院、七日御仏事之間家君令參給、
大臣殿・前内府以下以藏人召寄素服着之、袖之下ヲ引破テ直衣ノ上打懸着之、
無損事也、前内府不着之、建久、故太政大臣頼実、所着之云々、七日御仏事

之間可着座之由、雖奉行弁相觸、可着素服故不着堂前、吉田中納言一人着之、
御仏事畢各脫素服、取布施如例、右大将被參万茶羅供、即早參間、相加取布
施、次僧侶退出、次改堂莊嚴、為万茶羅供、是式、乾門院御沙汰也。此間公卿等參集、素服人々候
其所、大臣殿御直・右府東帶、平絹袍、鈍色裏、鈍色下重、同色素袴、裏赤、鈍・前内府・予・按察・高倉大

納言・右宰相中將等、右兵衛督布衣、表素服殿上人或冠、或烏帽子、藏人繁
澄檢非・束帶如常、其由同右府、束帶、懸老懸、右宰相中將以下不着素服所
座、関白被參、僧正參云々、次関白被着公卿座、即着堂前座、関白、内府、
唐橋大納言、雅親、右大将、源大納言、具美、四条大納言、隆親、左大将、万出小
路大納言、公基、中納言、実雄、為經、公親、冬忠、忠高、參議、侍從實季、左中將、此中四条大納

言・唐橋大納言・侍從宰相等帶劍・笏、公親卿・冬忠卿等持笏、不帶劍、
是不勅、自余不帶劍・笏、次阿闍梨僧正、自中門參上、先是掃部寮敷庭道於庭
授者也、不審也、誦御願文、刑部卿淳高卿草之、表白等儀如例、仍委不記、
上、其儀如常、行道三廻、廻疊上、讀御願文、高卿草之、表白等儀如例、仍委不記、

表白畢之間、家君・予同車退出、今朝式乾門院有御幸、内々儀、侍三人御
車八葉、殿上人一両乘車、御共出車兩三云々、御車寄左大将自閑道參役、帶
劍・笏、寄御車畢後撤云々、着公卿座、
今日右府隨身番長以下皆白単・濃打衣、番長白狩袴、檳榔、青簾、無文革、

不見、
一淺黃末濃下簾、豊端如例云々、

十六日、御經供養畢、例時之間、予於素服所言談前内府、家嗣、予問云、踏
ク、ミハ如何様なる時殊可用哉、内府答云、宿老人足ヲ出シテ行步、無下事
也、取布施、聊晴なる時用事也、又童女御覽時、被殿上着御前座、殿上々戸
北銚立許足カヲ押ヘテ於戸中踏ク、ム、ゆ、敷有気色事也云々、奴袴結口薄テ押合
之ハ様ナル、為答也、奴袴長吉也云々、

十八日、今日万里小路大納言 公基、初被着心喪服、於此色者、往古強不及日、鈍色
直衣、有文冠、卷纓、車以下其外物具等如尋常、只一身着用心喪色也、只沓
敷用平絹也、

十九日、除服以後裝束事引勘之處、長元九年院後一条、大二条殿于時、除服之後、
着心喪束帶參内、但神事・吉事之時、被着綾裝束、承保元年二月土御門右府
被着宇治殿服、十月可除服之由被宣下、是可供奉御、同月着陣之時着心喪、大治、
御事、花園于時内、以下卿相兩三着素服、五旬以後被下除服宣旨、除服以後一
向吉服之由、粗有所見、久安、待賢門、素服人除服之後一向吉服之由、所見分
明也、

廿六日、今日七僧法会也、御正日無日次、仍今日被行ところ也、予着束帶、
無文平絹袍、鈍色下襲、平絹、鈍色平絹表袴、裏甘、白袖、白単、大口、甘子、鞆如常、但可猶予歎、
各用平絹、不帶劍之間、平緒・劍等不能調、檳榔車、青簾、無文黑革為端、裏鈍色、淺黃末濃
下簾、豊端淺黃平絹、右府車同予、但豊端普通纒綱云々、
卅日、未剋許少外記 某、持來除服宣旨、為後見書留之、其書様、

前右大臣
右大臣
前内大臣

陸奥出羽按察使藤原朝臣伊平

權大納言 藤原朝臣公相

藤原朝臣実持

從 二 位藤原朝臣宗平

參 儀藤原朝臣公光

右兵衛督 藤原朝臣有資

從二位行權中納言藤原朝臣親宣、奉勅、件等人宜除四條院素服令從公事者、

仁治三年二月卅日大外記兼備後守中原朝臣師兼奉

大臣殿御覽之、即陰陽師賀茂在盛之許被尋除服日次、今日宜之由申之、仍催

具之、大臣殿・予・関白令八葉車不用素服之時御車也、前駟人知能、布、浅香、仰所司、仰可取

遣序素服之由下家司、家司 忠宣、取寄素服等、相具御祓具並儲二条河原、二条河原

可宜之由、陰陽申之、戌剋許大臣殿御行水、其後清淨御衣等ヲ令着給、予又如此、次家君

之着御小直衣給、予着狩衣、不下袴、只結リ押下也、同車向河原、先是立儲

八足、南西、其下二置大臣殿御素服居士高坏、陰陽師參設、在成之盛、車駕立榻、次

進賜物、前駟益送、家君乍御車中取之、車中令置給、陰陽着座之後、下家

司着布衣、參、以刀切素服流河原、次陰陽師祓、畢進麻、次撤贖物等、次下家

司立替幣立麻、八足立替、次又予力贖物ヲ進、予取之如元、先次進麻、予祓、畢返給、

次懸車於牛埴畢、

黑直衣皆具衣、單、下袴、入袋、家君御袋與予人同袋、令下家司令設河原給陰陽師、

今度之儀、一向可吉服也、仍如此除素服許、着黑直衣、大治・久安等例、仍

着吉服修祓也、除素服之後着心喪色人、猶着黑物可慎也、

(識語①あり)

諒闇記 後白河院崩、土葬、在位後鳥羽院亮陰、祖皇例也

山槐記

建久三年三月十三日、乙酉、天晴、寅剋太上法皇崩、御年六十六、于時御六条北西洞院西亭、自去年十二月御不食殊令增御、及閏十二月御身体令腫御、

俄被始行御逆修、内外御祈禱不知其數、被立伊勢公卿勅使、被始日吉臨時祭、

孔雀經、尊星王、五壇法、如此等秘法甚多、然而御年算有限、更無感応者歟、

医家云、此御病称水腫、カワ皮肉間水湛、次第損五藏、腫極膚破水出、医術不及

云々、但事不至極之時、以灸可均歟、而御灸治不令堪、御藥不如法、全不令

見玉体於醫師御、去年以後纔兩三度奉見云々、祇候御前人二品宣陽門院、左

中将親能朝臣・左少将教成朝臣・能盛法師・大膳大夫業忠等云々、此御病者、

自御足令腫上御、正月比及御陰囊、其後令減御、又及御胸・背、御痢結之時

者、令辛苦御、供瀉藥頗令落居御、以之謂增減、於御本病者、逐日得力、御

沐浴之後、必令增御此病云々、而去月晦日有御湯殿、其後至于八日無殊御事、

院中上下偏喜御減之由、九日夜又令增御、自左腫内方水令出給云々、本自医

師等恐申土用中、自去月廿八日土用、来十八日入夏節也、果有此事、昨日每

日御所作令行護摩御、又令転読法花經二部御、一部無言、是多年御自行也、其外又

由被仰之、改持草子經令読御云々、凡法花經御転読過八万部也、依近日例、大原本生房聖人參上、

有臨終行儀事、此間每日御練習云々、御念仏過千反、聖人退下之後、又有召參上、御念仏

過百反、取五色糸、向西方端坐、如眠崩、決定往生御相也、卯剋許自左大

弁宗長、許告送、其後馳參、召近辺陰陽師有身固事、着冠直衣、垂纓、不乘

昇堂上見公卿座、太政大臣兼房公、直、左大臣実房公、同、被候、予同着座、右大

臣以下被候西面迎、左府云、関白參入、被參内畢可有彼議事、参内可宜之由

被相示、仍可參也、同參入可宜歟者、宣陽門院、母儀、女房少輔御乳人子、成經卿妻、

若狹守範綱・大宮大進光遠出家云々、御葬送明後日也、可用第三日之由被仰

置云々、今日乙酉・明日丙戌九欠、明後日丁亥重、今日吉、明後日重、然而

依遺詔歟、頃之左府・予參内、中宮權亮云、可參内、有関白命、仍申其旨了

者、以權亮申參入之由於関白、今日御物忌也、撤小台盤、仍不着殿上候御殿

南弘廂、左府同被候此所、近日煩石淋、被加灸治云々、良久関白直衣、垂櫻、被坐

鬼間、又被敷円座二枚、以藏人頭大藏卿宗頼朝臣左府・予可參之由被示、仍

參上、各着円座、関白召宗頼朝臣、々々献官・外記勘文、左大史隆職、広房、大外記師直等勘文、関

白取之披見、懸紙一枚内被籠三通、官勘文、二通又有懸紙、件紙被留傍、被授左府、々々披見一通、且被授

予、々見之間、又被授一通、予返一通於左府、左府又披見一通、相加予返

上之、勘文籠懸紙被授予、々披懸紙見之、乍三通如元籠懸紙授左府、此事等強而退案之、初度文不可返左府歟、非法、然

勘文大旨

淳和天皇崩之時、仁明天皇依養子有諒闇、

宇多院崩之時、村上天皇為孫無諒闇、但十二月有音奏、

白河院崩之時、崇徳院為曾孫無諒闇、但鳥羽院有一年御服、

仁明天皇依養恩、叔父淳和天皇崩御之時、已有諒闇、鳥羽院為白河院孫、依

養恩之深有一年御服、雖為遜位之後、何又不准之、随安德天皇令赴西海給之

時、雖三宮御坐、以太上法皇詔有伝国事、只任次第踐祚之時、猶依恩深有此

例、而非継体之儀有即位、偏法皇之殊御志也、争無諒闇哉之由、左府相共申

関白、々々被諾、召宗頼朝臣内々被仰大外記師直云、依承和例可有諒闇、其

間事可勘申者、此後依関白氣色左府相共退出、抑於院左府云、前駈着布衣參

内如何、予云、如此之時不可及沙汰歟、左府諾、左府前駈二人着布衣、被乘

中將公房朝臣車、太相国前駈一人着衣冠、被乘我車、太相国不被候議定座、
午剋帰東山、

後聞、於旧院長講堂東弘廂被議定院号、右大臣兼雅、右大将頼実、已上、藤

中納言定能、左衛門督通親、民部卿經一、平中納言親宗、右衛門督隆房、

別当兼光、左大弁定長、已上、在座、自下臈申上、以後白河院為院号云々、

右大臣後白、右大将後白河、藤中納言後白、左衛門督東六、民部卿後白、

平中納言東山、右衛門督後白、別当後白河、後、左大弁後白、

此事議定之後、殊不被申関白云々、後日大理云、関白兼内々被命云、東山宜

歟、後字先例以音云習也、ナラフ、訓不宜、又有法住寺院儀歟、臣下建立寺号也、不

可然、隨已荒廢之地也、又後聞、今夜被奏遺詔、前兵衛佐仲経朝臣為使、別

当兼光、後日云、參陣奏之、有固関・警固事云々、又聞、及下格子剋限下朝餉

御格子引遣、是依凶礼歟、及晚懈怠歟、其後立下云々、下昼御座御簾云々、

又聞、関白依氣色殿上人皆卷櫻、左中弁親経朝臣垂櫻參入、聞此事忽卷、中

宮權亮忠季朝臣依不奉殊命、如元垂櫻云々、又後聞、今夜有御入棺事、御棺自先年被

作儲、而建春門院御時被奉之、其後又被奉高倉院、吉時亥剋庁官四人昇、二人取松明

前行、一人持香呂又在在前、西織戸中門北卯西廊局、二品西妻持參之、左中將親

能朝臣・右中將基範朝臣取脂燭前行、左少將教成朝臣・右少將忠行・大膳大

夫業忠朝臣侍隨此役無先例、右馬頭入道資時、周防守入道能盛也、若狹守入

道範綱、生、等昇御棺、法印静憲襄、已上九人御入棺役人也、後日民部卿云、

三衣被置御面上、御念珠・御経・御法服・御湿衣灌頂之時所令用、等被納之、御

室守覺、令沙汰給之、御棺蓋或打釘、或不打之、有両説、而兼無釘、仍不被

打之、又以四丈布二段結之、或用一段、而下管寄、静賢結之、被止供膳・御湯殿・

御手水等事、是兼日仰也、又不被入所々阿末勝、第三日可有御入棺、若有暑

氣者可斟酌之由有御遺誠、而有暑氣、御体日来令腫御、又水令出給、仍今日
有此事云々、後御事民部卿^{經一、別當}、右中弁棟範朝臣^{非參議、別當}、右少弁資実^{判官、奉}、奉
行之、凡者右府口入云々、

後日奉謁御室、被仰云、放御座南方明障子、御跡方置御棺、放御晝面奉入御
棺、無敷物、有引覆、其上奉覆御法服、^{御灌頂之時所着御之御法服也、是前大僧正公、}
^{可被入湿衣、我向右府、々々云、小帷体物敷、被入帷之由所見、々々令問御善知識聖人本生}
^{房、答云、灌頂之時衣上灑水、依其儀号湿衣、是法服名也、一一、後日右府云、乍帖被入御}
^{跡方、依無其所、如表御袴不入之、只入御袍、平袈裟、裳、又入五鈷、御念}
^{珠、御枕、依略儀不、三衣、諸真言、小字法華經兩種加入銅筒、一御善根因縁}
^{事云、大礼之時改尋常儀、略儀只如恒云、}
^{々々、今諸事被用平生儀、仍所為也、一一、後日湿衣事問三井寺禪覺已講之了、}
又入銅筒置御枕、入土砂事畢、不立明障子立屏風於其所、^{能盛法師立之如常、先年}
^{夏入道民部卿親範問喪礼}

昨日參禪門、^{粟田}申奉雜事之次、申云、非諒闇者可着心喪裝束也、而先例其
体同歟、如何、禪門被仰云、我近衛院御時着之、為坊時權亮之故歟、冠卷
纓、表衣如尋常時、青朽葉無文穀半比、下重、鈍色平絹表袴、^{裏赤、如恒、白单帷、}
塵蒔劍、^{黒地上無文、只、紺地無文平緒、縁文、非恒体、浅帯、笏、扇、襪、沓、}
^{打敷金蒔也、}車如恒、

今日出家人、二品女房少輔、^{御乳、人子、信濃、故陰陽頭}前源宰相、雅賢、若狹守範綱朝
臣、大宮大進光遠、前上総守為康、^{保力、在憲女、}中務權大輔經業、女房少
而停止、正月依高倉院御忌月、今月每年被行也、

十五日、丁亥、陰晴不定、今夜有^{〔本〕}大上法皇御葬送事、日設之後參入、^{〔有〕}文直
衣、卷
纓、亡者未出御之間卷纓、例也、乘侍從車、車副四人如恒、令持金銅金物榻、前駟三人、布
衣、一一、止警蹕前等、予下車之時、右大弁親雅參、令下車警蹕、着束帶、卷纓、取笏、于
時車副差出御車、欲裝束之間也、^{御簾、懸庇、}暫候東公卿座、一一、秉燭之後藏人

来云、民部卿被申云、御仏供養已吉時成者、仍大宮大納言実宗、相共着長講
堂座、右大臣^{兼雅公、烏、}右大将^{頼実、}左衛門督^{通親、}坊門中納言親信、民

部卿^{經一、}權中納言泰通、平中納言親宗、右衛門督^{隆房、已、}別當^{兼光、衣、}左
宰相中將実教、大宮權大夫光雅、藤宰相中將公時、菩提院三位中將公衡、
前宮内卿^{季經、已、}六条三位經家、着座、御前僧法印澄憲、^{依御導師着、}宿裝束、山、法印良

宴、山、法印雅縁、^{興福、}法印実全、山、權大僧都弁勝、^{東大、}權少僧都禪性、寺、權少
僧都公胤、寺、權少僧都行舜、寺、權律師寬舜、^{仁和、}權律師仙雲、祐範、已講聖
覺、^{已上鈍色裝束、着甲袈裟、去年}
^{御逆修十二口、如其時之由被仰、}着座、三尺皆金色阿弥陀一、坐像、法花經
十二部也、一一、其後被始行說法、省略尤可然事也、結願之間、右府、右
大将起座被參御所方、予不取布施猶候座、大宮大納言以下被取布施、導師被

物三重、^{鈍色、題、}裹物一、^{紺藍褶、白布各十段、}此後予退出、今夜強不可參、大
治、故左大臣殿不參給、但非院司、予非近臣、又無故、然而在位之時職事、
所殘留只愚身許也、又次第昇進至于丞相、皆法皇之御恩也、子息又浴參朝恩、
自參議之昔及丞相之今為院司、不存是非、出御以前今度可候御仏事座之由、
所存也、有護摩五壇云々、光明真言、^{於御寢殿、}阿弥陀、法花、尊勝、不動、後

聞、出御之時、仁和寺御室、^{二品守、}同御弟子宮、^{無品道、}假治井宮、^{承仁親、}
聖護院宮、^{靜惠、}鳥羽宮、^{定惠親、}広隆寺僧都、^{真禎、已上六、}公卿右大臣、^{兼雅、}右
大将頼実、藤中納言定能、坊門中納言雅信、左大弁定長、前大藏卿^{泰經、}
習、右京大夫、^{季能、年預、宮、}大式^{範能、依、}列居座前、此外參入公卿三四人

又同列居、又殿上人廿許輩取松明至門列居、御車副、遣手二人許也、庁官八
人付轅、牛童七郎丸持御榻、下臈六人、^{久家、大夫尉公朝、大和守親盛、}取松明前行
又四人、^{左衛門尉美重、基、}持火蛇、^{〔在〕}燒香左御車左右、出御、西織戸中門并西門
^{安、資安、能兼、}油小、南行、六条東行、渡御法華堂、奉納之後、人々帰參、静憲法印一人留

令入土石、始終致其沙汰、出御之後、御所御跡事判官代勘解由次官清長奉行
之、翌日来云、御在所御晝湿融板敷、女房先撤御晝只一帖許、^{〔體〕}放面、一一、

清長相率備前守仲国・所衆二人參入、所衆一人持竹筥一、自片獻之、竹枝長三尺、許、五六寸筋ヲ結合タル二結ヲ一ニ結合ナリ、工一人、參入、件塵等納櫃一合、所殘又濕納灰櫃、著カ件櫃二合并無面御置一枚仲国相具之、八条向河原末、切流之、件之御座跡之護摩壇之、著カ自法華堂令婦參之後、每日御仏供養、御導師法印雅縁、被物一重、裹物一、題名僧一裹、右大将以下着座、右府被候閑所云々、後日謁右府、被示云、於六条油小路乘輿參会法華堂、此事有難人云々、又云、於法華堂不脱藁沓昇堂上、而宮々脱之令座置給、如何、又云、婦輩之時、取法華堂辺草テ中ヨリ推折天、輪奈之方ヲ上ニテ、草之末ニ天中ヲ纏天持之、脱藁沓天令切之天河ニ流、大葉山、而無山流川云々、洗足乘輿、渡河之時、手ニ所持之草ニ息シ天人河、又云、服・杖同時物也、仍不突杖、用杖之時用桐木之由被注宇治左府記、御葬了後出家輩、大夫尉公朝、大和前司親盛、檢非違使定康、出家男女十五人、先跡不聞、未曾有事歟、後日奉謁仁和寺宮、被仰云、可突杖哉否之由問民部卿、答云、雖可然省略、不可築歟之由、右府所被申也者、仍不突之、見宇治左府葬札十卷抄之処、成服・杖同日之由見外記云々、今日無着服之人、不突杖有其理、但鳥羽院度、別当入道惟方、突杖、平三位入道範家、見之稱可然之由、又突杖云々、於法華堂門外放御牛引入門内、非大伽藍不可放歟、又導師・呪願立轅方之由多見旧記、而大祀葬場殿儀、北首安之、於北座導師・呪願奉仕之由、戸部称之、仍御堂廊南面去砌二許丈、以鴉尾為北、立御榻、呪願法印良宴立西、導師法印澄憲立東者也、御輿葬場殿之儀雖為御首方、用車之後立轅方之由、皆注旧記、此事猶不甘心事也者、又奉斂之時、可解御棺結布之由、静憲法印所示也、我答不可然之由、火葬之時解之、四角立斎柱松カ頗差上笠、仍解之歟者、静憲云、鳥羽院・高倉院御時解之、猶可依彼例歟、然而遂不令解之、高野御室母北政所葬礼藁沓卷紙、宇治左府不卷之由

見彼左府記、我今夜所卷也、祇園一切經会不行云々、十七日、己丑、藏人頭大藏卿宗頼朝臣内々示送云、来十九日可渡御倚廬、可令賜素服給、秉燭之程可令參内者、答云、可存此旨、但件日為衰日、雖入人数不可參陣、可得其心者、自近衛前撰政御許以季佐被示合、故院御仏事并可被着心喪之間事、大治、法性寺殿七月廿二日令着心喪給、同日染色・裁縫着給、同廿五日被參院、カラス必同日裁縫可着歟、申云、可令依御例給歟、但不必然事歟、又命云、非其職之身也、不可調冠如何、申云、何事有哉、又命云、只着心喪中陰以後可除之、其後不可着諒闇、為閑居身之故也、申云、有御心、又命云、久寿、法性寺殿解除之時被用帶、可存彼例歟、申云、彼時令着近衛院御服給、仍有御帶歟、今度只令除心喪給、不可有御帶歟、又命云、可修御仏事於御所者、可無骨、於法華堂可修也、存真言供養之由、導師可請護摩師權僧正勝憲、題名僧皆可請御前僧歟、將可用三味僧、マク被申云、於彼御堂先々行仏事之人用三味歟、但可在御意哉、又命云、仏像等身如何、若又二幅許曼荼羅歟、申云、本所御仏三尺以下歟、且建春門院御時不可過三尺之由被仰歟、三尺可宜歟、但又法花曼荼羅猶可宜歟、又命云、心喪之時先々借用人車必然歟、近年用八葉切物見車、件車如何、申云、先々我御車無骨之故歟、被用件八葉御車何事之有哉、十八日、庚寅、六条三位經家、来云、明日院初七日、可參入、可卷纓歟、答、未着諒闇裝束之間、雖有両説、不可卷歟、又云、自昨日御懺法之次、被引御遺物於御前僧并護摩師醍醐權僧正等、昨日御袈袋、裹飯今日香御袈袋、敷櫃紙折敷二枚於置之、藏人左京權大夫光綱来云、自今日欲出仕、纓可卷歟、可垂歟、寿永度、依予諷諫民部卿經一、于時藏人頭、光綱不卷者、答、彼時不可被卷之由申畢、今度不可有相違、又云、明日雖可賜内裏素服、依衰日不可着之、其後雖為御坐倚

廬之間、猶着綾裝束可垂纓、答云、可然者、依日憚不着之、仍不可卷纓歟、無憚之人雖未着諒闇裝束、已着素服了、卷纓可宜歟、又云、來月二日可還本殿、其後以吉日可着諒闇裝束、而更衣之条如何、答云、可着吉服夏之裝束歟、但不可着白襲歟、

藏人勘解由次官親国来云、倚廬并諒闇御裝束事、日来頭大藏卿宗頼朝臣申沙汰之、而猶五位藏人奉行為吉例、可奉行之由一昨日被仰下、其間事不審多之由、条々尋問、少々答畢、又云、明日依平納言親宗、衰日不可着素服、其後裝束等事示不審之由、答如光綱、蓮華王院宝藏可為公家御沙汰、仍藏人所出納付封、六条殿御倉為左衛門督通親、奉行、造酒正久家宣陽門院年付以下四字、底本小書スルモ、意ヲ以大書ス御葬日所被懸御車之御牛、御葬日昼兩三度吠云々、

今日女院宮々以下被賜本院素服云々、常儀葬礼日給之、而去十五日依為重日及今日也、葬礼之後日有例云々、

院宮

殷富門院母儀故高倉三位 宣陽門院母儀丹後二位

前齋院母儀同殷富門院 前齋宮 同

仁和寺御室守覺親王 同宮道法親王

天王寺宮定惠親王、寺 梶井宮承仁親王、山

聖護院宮靜惠親王、寺

広隆寺大僧都尊禎

女房

二品宣陽門院母儀

公卿

右大臣兼雅公 右大将頼実

藤中納言定能 坊門中納言親信

民部卿経一、房 左大弁定長

高三位泰経 右京大夫季能

大式範能

平中納言親宗、左宰相中將実教、新宰相中將成経、漏素服モル、殊鬱陶云々、可着之人々御平生之時皆被定云々、

殿上人

左中將親能朝臣 右中將基範朝臣

左少將教成朝臣 右少弁資実

左少將忠行

判官代

源仲清 藤原光成

藤原信綱 同範光

藏人

藤原良輔 同親俊

源邦季 藤原定仲

上北面

大膳大夫業忠朝臣 若狭守範綱朝臣出家

備前守仲國

下北面

前上総守為保出家 長門守成季

大夫尉公朝出家 大夫尉定康出家

前大和守親盛出家 檢非違使章清

檢非違使俊兼

能蓮周防前司
能盛也

性昭檢非違使
康賴也

進物所

檢非違使定康

主典代

筑後守景良 西市正政泰

散位資成年預

召次長

左將監中臣近武 右將曹下毛野敦助

後聞、左衛門督通親云、自旧院庁持參御素服於宣陽門院御方、庭上供御座、

小筵二枚上計黒縁半帖、立廻御屏風、自御服所獻黒染御單一領・御懸帶、剋

限女院着白御衣・白生御袴シロキス、シ、下御上座脱本御衣、不令脱御袴給、其上黒染御

单并御素服、令婦昇給云々、

自仁和寺御室有御消息、被仰合御仏事間事、今夕令着御服給云々、翌日見參

之次、被仰云、自旧院主典代持參素服、納折此間御宿所也、於中門廊入道左大臣亭、縁着黒染

装束、用絹、故高野御室母北、下中門地上着素服、今夕自旧院被奉御処分帳於内

裏、伝聞、右府兼雅、參入、関白被坐鬼間、供掌灯、右府被參此所、兼殿、右

少弁資実令持御処分帳手筈民部卿經一、右少弁棟範朝
臣、右少弁資実等封云々、於主典代西市正政泰參上、

資実取之持參鬼間、関白召頭大藏卿宗頼朝臣令解封、覽之、右府令持出二卷、

御劍目録砂、於左中將家経朝臣召寄之、又覽手箱、以頭大藏卿被進御所云々、

今日長講堂被懸黒染御簾云々、

十九日、辛卯、上晴、故院初七日也、午終剋着直衣無文、此直衣日来時々所着也、
諒闇裝束未着之間、綾雖不可

禪、又旁有便宜、大治、未着心喪之人多着無文直衣云々、諒闇之時未着鈍色之間、予着衣、
冠、垂纓、少納言親家車長物見、不上簾、車副四人如恒、前駟四人可着衣冠、聞誤着布衣、參

六条殿三所殿上、旧院、殿富、皆立黒漆台盤、敷鈍色縁帖、簡・日記辛櫃如恒、

又所々帖皆改鈍色縁、寢殿并公卿座撤尋常御簾、不懸御簾下格子、寢殿東北

卯西廊殿富門院
御所也、南面下格子、暫候宣陽門院殿上、依近長講堂也、打集会鐘、

頃之止鐘、仍着座、此後事不始、散花机忘却遣取之故云々、預令承仕立之螺

鈿机一脚、在地、正面弘廂南北妻立之、公卿在、置花筥、右中弁棟範朝臣無文冠、
卷纓

布狩袴、切裾前長、如御倉小舍人、鈍色衣、同单衣、持白檜扇、不着素服、来予座下、示可被始行之由、予目御導師法印

雅縁、宿裝束、題名、堂童子勸解由次官清長衣冠、
吉服、上総介親長、同、經予与大納

言座帖上賦花筥、日没之程説法畢、有布施、導師被物三重、色、綾、鈍裏物一、

紺藍摺、白細
布各十段、衣紙、
裏之、題名僧同被物一重、裏一、凡僧紙裏、予不取之、大納言已下取之、

事畢予起座、此後有例時云々、

參入公卿

予垂纓、平
絹直衣

大宮大納言実宗、被示云、殿閣大納言垂纓者、依
可定申初七日御誦經使、着束帶吉服、

左衛門督通親、無文冠、卷纓、直衣鈍色殊濃、有赤氣、以薄色衣、面地志々良綾、
奴袴鈍色薄、与直衣色各別也、不知其故、是心喪裝束云々、志々良絹華美、
物敷、大宮大納言依為傍座言談、又示予云、金吾云、
今夕為賜内裏素服可參内、其時者可着吉服也云々、

權中納言泰通、垂纓、昨日被示、
予答垂纓之由、直衣、

平中納言親宗、垂
纓、束帶、

右衛門督隆房、垂纓、昨
日示合予、直衣、

別当兼光、卷
纓、束帶、

左兵衛督能保、卷纓、直
衣、事未始起座、

二位宰相雅長、垂
纓、束帶、

左宰相中將実教、直衣、
纓、束帶、

大宮權大夫光雅、卷
纓、束帶、

新宰相中將成経、垂
纓、直衣、

藤宰相中将 公時、卷、

花山院三位中将 忠經、垂、

治部卿 顯信、卷、

藤三位 雅隆、卷、

前宮内卿 季經、卷、

六条三位 經家、垂、

菩提院三位中将 公衡、卷、

修理大夫 定輔、垂、

左衛門督之外皆吉服、

御仏 三尺皆金色葉師、

御經 如來像一体坐像、

有諷誦、四个所、不法親王達於聽聞不被着素服、只各召寄被置傍云々、実印僧

都持之、自南遣戸献之、納折

（別掲ノ因、此ノ位置ニアリ）

後聞、素服人々着冠在彼座、未着服之人吉服、着服了之人着素服、是每七日

着之例也、但近例或不着之、

右大臣 兼雅公、 右大將 賴美、 着衣袍、平絹、面如四位袍、裏鈍色、袍上着素服、不可

之由、有難之人云々、 是素服例、着烏帽子之日、猶被着此袍、衣冠不可着烏帽子

藤中納言 定能、 民部卿 經房、 單練黒染袍、是直、其上

今日公家被行初七日御誦經云々、大宮大納言 実宗、 參陣、被定申使、又被定

二七日使云々、

当初七日公家御物忌例也、而或云立簡、或不立簡、付御簾不付不慥、今日依

神宮怪異本自御物忌也、未決之間、不立簡云々、今夕主上渡御倚廬云々、後

日藏人右衛門權佐長房來問不審事等、答事等、以殿上閑院、東北子午廊為倚

慮、（廬） 件廊有五間、其趣、南一間 南廊、東 為御厨子所、北五个間為倚廬、今度

自北五个間不入南御厨子所、殿上如安元、用本殿上東七間、御厨子所渡藏人

所、件所与倚廬之間構釣屋、 御几帳并御帳帷皆有紐、御樋台並女房候所坤角立廻立節、（廻） 置

用黒染縁、而閑白聞此事、被仰無縁之由、仍薦上只閑付蒔、殿上置黒染火櫃、

出御々殿良東面戸、経台盤所南簀子、入御倚廬西面北一間、藏人頭右中将実

明朝臣取璽篋前行、中宮權亮忠季朝臣取御劔候御後、閑白着直衣候御共、（先日）

中保元例、仍被着直衣云々、 実明朝臣持參御冠、藏人頭大藏卿宗頼朝臣持參御裝束、実明朝

臣又持參御宿衣、鈍色、先日閑白被尋仰遣云、件御綿衣為黒染之由注旧記、而保元下官曆

例、只保元度 有黒本結、今度、不召之、相加御裝束返給藏人所、安元、不召

云々、後聞、頭大藏卿供御草鞋之後、取脂燭前行、在璽後、（云々カ） 可前行歟之、公

卿以下着素服、

公卿五人

大宮大納言 実宗、被申母堂衰日之由、閑白

左衛門督 通親、着心喪直衣昼

左兵衛督 能保、

藤宰相中将 公時、

左宰相中将 実教、雖

兼日内々被仰、左大臣被申所勞之由、其後被仰、予申云、於被入人数

者奉了、依為衰日不可參陣之由申、雖不參内、（陣歟、 可為人数之中云々、

而猶改定、先例大納言為上首着之、不及中納言云々、仍今日被召大宮

大納言、（元） 保光、故京極太相国 于時大 納言、為定御誦經使參陣、便被入彼人数

之例云々、大宮大納言被定申御誦經使也、

殿上人

藏人頭右中将実明朝臣

藏人頭大藏卿兼中宮亮宗頼朝臣

右中将兼中宮権亮忠季朝臣 依子衰、日不着

右少将信清朝臣

左中将通宗朝臣 依衰日雖、受不着

左馬頭高能朝臣

藏人左京権大夫光綱 依衰日不着、限以前退出、剋

式部少輔範光

藏人勘解由次官親国 依平中納言衰、日不着退出

藏人右衛門権佐兼中宮大進長房

自身衰日之外、於二親衰日不可憚之由有関白命、仍長房着之、他人尚不着之云々、

藏人

左衛門尉基保 廷尉

文章生範高・成広・忠綱

新藏人業家雖初參、未從事、仍不入之、

非藏人

基兼 康業

出納

右衛門府生景弘

左兵衛志為時 一臆右衛門志貞重母服忌月也、雖除服、不賜之、貞重忌月出仕不穩便、

御厨子所預

散位久信 右衛門大夫、

典侍

帥 七条院御第云々、

掌侍

伊与 弁 越中

命婦

右衛門佐 土佐

藏人

能登 相模

惣人数八人可給云々、

大納言以下經築垣内 兩宰相中将、經築垣外、 出西洞院面北門、藏人一人取脂燭前行、次公卿、次藏人一人取脂燭前行、次藏人頭以下前行、列門北腋、南上東面列立、

安元、東面、被尋吉方、雖申乾之由、猶東面各着之、贊布、如小狩衣、下重国綱、人北上東面、 差了經本路共障方殿上陣前屏外脱之、召陣 由所、 奉也、殿上人不着殿上、官預給云々、如此記者、矣陣歟、但伝聞、猶可為次說歟、 又後聞、

公卿着素服着陣不持笏、於劍者猶帶之、左兵衛督在宣仁門代外不着座、左宰相中将雖給之不着、仍退出、倚廬母屋 在西、 北二間立御帳、囊南面開東北以

南為御枕、御帳外副北敷黑縁帖一枚、副南間南庭張隔敷同帖一枚、東廂北第

二間供昼御座、南北妻、敷二枚無縁、其上敷一枚墨縁、 第三間副東黑縁帖一枚、同間南桂母屋廂以

庭隔之、母屋西端有通路、以第四・五間母屋廂為女房所、敷無縁帖、母屋坤

角以立部立東北乾方開路、其内置御樋台、御帳帷・御几帳皆有紐、

於昼御座着御錫紵、中宮権亮忠季朝臣奉整御裝束、此事一人奉仕事云々、令

向戌亥御、不被改御本結、御半比緒二倍取結之、無垂御帶、麻上卷紙、着御

裝束了之後、召替御冠、櫛・髮搔如例盛柳篁、依召藏人自女房候方進之、召

御幘放御冠下麻布也、寸法太短云々、可令居昼御座給、関白參進、偷有被申事云々、
吉御直衣帖置御帖北帖上、次御解脫御冠、置御帳内御枕方、御錫紵忠季朝
臣禮擬皆賜藏人、後日左衛門督通親、云、着心喪直衣、是諒闇直衣同物也、
為賜内素服、着吉服束帶參内、後日御倚廬之間、着諒闇直衣參内、寬德、土
御門右府賜素服、同夜於直廬着諒闇直衣參御前之由被記、仍自倚廬間着諒闇
裝束所參也、

廿一日、癸巳、藏人右衛門權佐長房中宮大進、為関白使來、諒闇間宮御衣可為綾
歟、可為平絹歟、待賢門院崩之時、皇嘉門院令着綾給、建礼門院事内々相尋
之処、初令着綾給、而建春門院猶子之由、沙汰出来之後、被用平絹云々、
為之如何、予申云、待賢門院度非諒闇、建礼門院初令着絹之糸不甘心、猶平
絹可宜歟、

廿三日、乙未、頭大藏卿宗頼朝臣伝送関白命云、後白川院河每七日御誦經、初
度拈日次被發遣之後、先例或尚忌避之、或又不憚之、不同、師尚并宣平朝臣
勸申旨如此、今度何樣可被行哉者、

師尚申趣依事多悉可書写也、三月廿二日状、

雖初七日以後猶憚日次例

寬德二避御衰日、延久五同、嘉承二同、保元々同、五永萬元日次不

初七日外不憚日次例

延長八不憚辰日并重日、康保四不憚重日、長保四不憚御衰日、重日、延久不憚午日、

兩方共有例、可在時議、兼又初七日以吉日被發遣了者、每七日尤可被
立候歟、

御誦經寺事

每七日被改立、其寺者前々例也云々、他寺者雖相替、於蓮華王院者每度可

被立候、尊勝寺・最勝寺必可被立寺也、是為考廟・王考廟・皇考廟之御願
寺之故也、又七大寺必當六七日被申也、但延久之度、除元興・西大、入禪
林・円宗寺、其後猶除元興・西大寺被載御願寺等也、抑常住寺事、仁和三
年八月廿六日光孝天皇崩云々、九月三日先帝初七日也云々、七个寺修誦經、
常住寺、天安寺、神慈寺、広隆寺、禪林寺、神護寺、觀音寺、付之思之、常住寺往古寺歟、仁和已後初七日御
誦經為第一寺、其後代々御誦經必載此寺、仁和記云、遣使於山陵・七个寺
修誦誦云々、彼山陵在高野郡田邑郷、此寺在平野社南辺歟、

宣平申趣不云

延久五避辰不子人・御衰日、不憚午不子人、

辰・午日共不子人也、然而午日先々不避之、於辰日者可有憚歟、辰日不
哭之故也、

保元元八、十九、戊子、被立七々御誦經使、明日己丑、当七々日々次、殊難不見、

安元々八、六、当四七日、五・六依陵日歟、中宮御衰日歟、丑・未、十四、壬戌、五七
日、分十三日、辛酉当五七日、依九坎日歟、御衰日也、如何、廿五、癸酉、七々、
分歟、廿七日、乙亥、当四十
九日、依重服、院御衰日如何、

予申云、雖初七日以後尚被拈日次之条、吉例已多、保元以往皆被避御衰日、
不憚之者長保一代歟、是又雖為吉例、可依多例歟、抑延久、避御衰日、不被
憚午日、延長・康保、辰日重日雖被行之、皆以非御衰日、若御衰日候哉、不
可及他日次沙汰哉、如何、可被行御齋会所事、蓮華王院不可及異議之由所存
也者、

後日大外記師直來云、来月十八日依当公家御衰日、件日不可被立御誦經使、
是令許申給之由、頭亮所被申也者、
廿四日、故院御馬賜例時僧等、北面・衛府等引之、

廿五日、故院御牛給例時僧等云々、臨時祭停止、諒闇例也、

廿六日、戊戌、辰時調始諒闇直衣、主税助晴光日次宜之由所申也、

廿八日、法印靜憲修御仏事、

廿九日、參禪門、粟田右府被參會、被着故院御服、

黒染練単、直衣同体、付裏被垂、八葉車、懸下簾、榻如常、打黄金物、明日不可被更衣云々、五十日可着束帶之處、人々可着位袍、又可更衣云々、

我裝束不存得云々、

建久、
同三年四月

一日、無平座、故院中陰之中也、

二日、癸卯、雨下、主上自倚廬還御本殿云々、

今月諸社祭可停止之由、頭亮宣下大宮大納言、美宗、依為七々内也、又被下椽

宣旨云々、後日大外記師直來云、仁平四年依内裏穢被停四月諸社祭、或用下

支干、而宣旨狀不入稻荷祭、是依無官幣歟、仍今度不載之、

三日、甲辰、已剋着諒闇直衣、今日出仕日次宜之由、晴光所申也、仍着之、

四日、今日故院三七日也、仍午剋着直衣、諒闇、前驅、二人着衣冠、未剋事始、予候宣陽門

院殿上、右中弁棟範朝臣來示可着座之由、仍着堂中座、今日撤正面北、仍着

南間、先是又卿相少々在座、棟範朝臣來座後、示可被始之由於予、々目御導

師公胤、堂童子石見守能頼、申終剋事畢、布施色目見初七日記、予不取之、

例時畢退出、

參入公卿

左衛門督通親、諒、平中納言親宗、

右衛門督隆房、同、束

別当兼光、吉服、夏

左宰相中将實教、諒

大宮權大夫光雅、吉服、夏

藤宰相中将公時、諒

治部卿顯信、藤三位雅隆、吉服、

前宮内卿季經、六条三位經家、諒

修理大夫定輔、

殿上人

左京大夫顯家朝臣吉服、束帶、

右中将兼宗朝臣吉服、衣冠、

右中将成定朝臣吉服、衣冠、

右中将實保朝臣同、

右少將成家朝臣同、

左少將定家朝臣同、

前撰津守行房諒闇衣冠、依

木工頭兼定諒闇束帶、依

前石見守能頼吉服、

退出之時、自御室有御使、仍參、被仰云、候丁聞座之時、法親王達素服各持

參之、天王寺宮自晴方以僧綱被召寄之、取素服許被置傍、我以已灌頂覺教

自此路持來、只乍入折櫃居士高坏所令置也、不着之、各只置傍也、

今日見宣陽門院殿上、有灯台二本、白木、金物不塗減金、女院御聽聞所御

几帳手白木也、自黒簾透見也、寢殿灯樓綱改鈍色、先撤御簾下格子、

謁藤中納言、定能、素

着冠・練單・袍、直衣云々、同奴袴、有裏、不更衣也、予問云、四月一日以後人々
裝束如何、答云、右大將賴実、更衣生絹黑染位袍云々、右大臣以下不更衣、
着束帶之時如何之由、人々存旨各別云々、

七日、頭大藏卿宗頼朝臣伝示送関白命云、諒闇之間最勝講備否事、備力大外記師
直・大炊頭師尚申状如此、可何様哉者、

師直申状趣、四月五日状

一条院長保三年壬十二月東三条院崩御、同四年五月被行最勝講、高倉院
御宇安元二年七月建春門院崩御、治承元年五月被行最勝講、共依為大嘗
会以後不被憚之歟、

後白川院代始久寿二年十一月被行大嘗会、

保元々年七月鳥羽院崩御、同二年五月最勝講不被行云々、

此外諒闇時之最勝講、皆依相当大嘗会以前不被行歟、

師尚朝臣申状趣、四月七日状

一、被行例

長保三年一一、同、大外記一一、

安元二年一一、同、

一、不被行例

保元元年七月二日鳥羽院崩、同二年五月不被行最勝講歟、不見日記、

今案、後白川院河久寿二年七月廿四日踐祚、十一月廿三日大嘗会、然者

今度非代始并大嘗会以前、然而不被行歟、

代始大嘗会以前多被行臨時御読経・御仏事等、何必憚最勝講哉、於最勝講者、
御殿改御裝束、緇素刷其衣裳每事美麗、不似亮陰之儀、仍代々不被行歟、長
保四年已後連年不必行之、寛弘六年以後行之歟、然者以長保例不可必規模之

処、治承以云母后諒闇之儀、依考妣雖不可有差別、長保・治承者母后例也、
保元者考廟例也、彼時法性寺殿撰錄之間也、定有御存知之旨歟、就保元之吉
例今年不被行何事候哉、予申云、諒闇間可被行最勝講哉否事、師尚朝臣申状
非無其謂之上、中陰可及五月、頗可猶予歟、就保元之例被停止何事之有乎、
仍言上如件、

右少將高通朝臣来着、吉服、束帶、ソク卷纓、

八日、右中弁棟範朝臣、烏帽、重服、布狩衣、袴、來、在中門廊縁以伯耆守盛房示

云、旧院人々依有被申之旨參入、候院之間、右府以下被申可參入之由、仍不

着冠、其恐不少、一一、予着吉服、冬直衣、烏帽、依非公事隨便宜調、雖可

着諒闇直衣、内々事隨宜、又着冬衣事老臣之例也、能信・能長卿着之由見寶房記、故九条大相国伊通公被祇候九条

院之時如此、先日調左府之時、被示云、故内府公教公又如此、棟範朝臣云、右府已下旧臣被申云、五七日依當公

家御衰日、不可設法会儀、仍七々可被行法会之處、為復日、内々問先例於主

水正良業、故大外記、頼業子或憚之、或不憚之、可相計者、予云、代々避公家御衰日、

先例也、至于重服日者、吉例已多、七々日被設法会何事哉、棟範云、此事又

可申合左府之由、各被申也、仍可參日也、又云、今日二品被行御仏事、被奉

造立大日、公胤為導師、布施導師卅、題名僧各十、次有結縁経供養、凶絵普

賢像、近衛前撰政沙汰也、被副捧物、録連打枝、懸・経、右大臣已下院中当祇

候人々各調一品紺紙金字相副、被物一重、法印澄憲為導師、後聞、又書写金

字四卷経、入道太相国師長、以下各分一品調、有願文、端不書院号、年月下

書垂也、大学頭在茂朝臣草之也、無灌頂、記故院七々中也、

九日、夜陰右衛門督隆房、被光臨、吉服、布衣、先日着諒闇畢、然而内々夜

陰事隨便歟、被示云、奉為故院可修小仏事、雖非近臣、故帥入道多年執筆也、

我身又有便宜、朝恩之故也、

十一日、一、公家被立四七日御誦經使云々、式部大夫隆仲婦来云、早且参
 閑院、皇居也、大外記師直遲参、及申剋使立、左中弁親經朝臣雖参入、称大外記
 遲参之由退出、大夫史隆職不参、上卿大宮大納言実宗、先日定申使畢、仍不
 被参陣、御誦經物裏庭置案上、並立床子座前立屏外、大外記参上之後、移立東門南
 辺、大外記立門外南柱辺、行事・使等不昇之、人夫等昇之、進發使等相副藏
 人五位、式部・民部大夫等相交、一寺可有五位二人、而多以不足、内舍人各
 一人着衣冠、又相副内豎四人、相兼便宜寺々副之、隆仲為禪林寺使、ツカヒ内豎兼
 法勝寺、取請文之間、良久隆仲就然立西門、内舍人云、参向禪林寺、取請文
 可婦参、更不可向彼寺者、仍自彼門婦輩者、後日大外記師直来云、御誦經物
 為官沙汰、自内藏寮献之、有送文、其上書寺名、初・二七日無立紙、三七日
 有立紙、〔定カ〕唾嚙物体不足、定佐渡布十段云々、初七日行事弁令開見之時見之、
 如網目広、弘一寸許、長五寸許帖之、左右京職召人夫、其体小童・下女等昇
 之、初・二七日内舍人皆着布衣参入、有虫損一陣之沙汰、仍三七日或着袍、
 或褐衣参上、諸大夫初七日十四人催出、其後一寺或二人、或一人勲之、無懸
 手之儀、至于内豎者、近年只有四人、仍有懸手、行事弁・史・外記参陣、所
 行事大夫史隆職申云、先々於陣中所立使者、仍初七日於門内立之、但引勘先
 例、於陣外皆所立也、至于諷誦物可為官沙汰、於立使条者、可為外記進止、
 仍猶於門外所立也、
 十二日、法勝寺執行法印章玄修御仏事、有諷誦文、
 十四日、乙卯、別当兼光、尋送云、御齋会日召具官人如何、折節若可省略歟、
 答云、尤可召具、為河東、為大会、臨期可召仰事出来歟、更非美麗之儀歟、
 又云、来十九日可始私序事、〔使カ〕着烏帽子・直衣如何、答云、可宜歟、又云、直
 衣用無文穀不可有難歟、答云、安元、故帥大納言隆季、當時右府兼雅、用

穀、不可有難事歟、又平絹不目驚事也者、女房右衛門佐於法華堂修御仏事、
 等身阿弥陀、大字阿弥陀經四十八卷、有諷誦文、
 十六日、民部卿経房、送書云、若宮戸部勅別当也、可着御々輕服歟、法皇御服也、又任近例
 可為着除之儀歟否事、師尚朝臣・師直申状如此、一、
 大炊頭師尚朝臣申状趣注詮、
 祖父者二等親、五月服也、若宮雖未令加首服給、御年已十四、漸令及成人
 給、争不令着御法皇御服給乎、着除者省略之儀也、今度事已可寄他歟、可
 被相尋法家歟、
 白河院令着陽明門院御服給、祖母、日数三个日、太上天皇以日易月也、然者
 二等親者五日歟、次日令除給、依日次也、太上天皇御例雖不可准他、頗可
 准扱歟、兼又二条院儲君御時令着鳥羽院御服給云々、可被相尋歟、
 大外記師直申状趣
 李部王記云、承平元年十二月廿日、除法皇喪服、載彼記、不注之、仍今案、云々、凡
 依恩之厚薄、有服之浅深云々、当宮之御書始、成人之礼、立身之要、皆是
 為法皇御沙汰、〔致カ〕被嚴重之儀畢、其恩罔極、其德尽報、且任法意、可着五月
 服御歟、
 予申云、若宮可着御法皇御服事、滿五个月雖可令除給、白河院令除陽明門院
 御服給之時不被滿以日易月之日数、可准扱之上、二条院儲君之時、三个日之
 後令除鳥羽院御服給、至于此条者、太子・親王不可有差別、可依彼例歟、但
 保元之沙汰之趣不知給者也、可被相尋子細者、
 十八日、右府被行御仏事云々、依先日命昨日調送鈍色裝束一具、半丈六阿弥
 陀、金字法花經一部、此内阿弥陀心經以故院所給之御書為料紙、一字三礼手
 自書写、表紙十二部、有諷誦、為長草之云々、

十九日、自賀茂下社獻葵、氏人為使、故院七々中也、但穢以後也、祭停止本
 社御坐如恒、又社家可祭云々、氏人云、葵不可獻所々之由、社家存之、而猶
 可獻之由、自闕白家被仰下、仍俄獻之者、今日自上社不持來、懸簾如例、有
 平座政云々、諒闇之時、穢畢中陰之中、設平座初行政之例也、撤椅子・床
 子・印机等、皆敷半帖也、上卿右衛門督隆房、一一、出陽明門、縱雖不及夜
 陰、今日不可有出立之由、上卿存知云々、有出立之時、只陽明門許有之、無
 外記門・南所等出立也、延久、上卿隆綱、件年師平記云、依先例無出立、嘉
 承、上卿基綱、件年師遠記云、有出立、不注不否、保元、上卿花山院禪門、
 依嘉承例有出立、永万、定房無出立、安元、実綱依所勞不着南所、無出立、
 寿永、可尋歟、此政皆中納言為上卿、延久以往未勘之、
 廿日、今日殷富門院有御仏供養、金色等身尺迦・綵色三尺普賢文殊、金字法
 華一部、表紙十二部御自筆、金泥阿弥陀經一卷、願文・諷誦式部權大輔敦綱
 朝臣草之、別当右衛門督隆房卿加署、左府、藤大納言、実家、一一參入云々、
 左府・藤重相后位之時大夫也、仍殊參入云々、
 廿一日、仁和寺御室守寬、有御仏事、有諷誦、有堂童子、次宣陽門院御仏事、
 願文・諷誦左中弁親經朝臣親王、草之、大臣、大納言、一一、仍喪服、右
 大臣以下取布施、兼不着座、取布施之後、右府・右大將着座、藤中納言以下
 猶不着座云々、今日人々着直衣云々、
 廿二日、持明院宮僧真禎、有御仏事、次大式範能卿修御仏事、皆有諷誦文、
 廿三日、時々小雨、午剋參旧院、被行曼荼羅供、來廿九日可被行云、仍着束帶也、
 不帶劍・笏、須帶也、先可着殿上座、事始之時可撤、而縮今日、暫候宣陽門院殿上、左府・藤大
 也、道場依為長講堂也、然而有事煩不持劍・笏者也、
 納言被仰、旧院公卿座、未刻左府被參堂前、予相次着座、被命云、不着
 殿上、不帶劍・笏候公卿座、右中弁棟範朝臣來示事具之由、即令彼朝臣申事

由於女院、殿富、宣陽門院也、殿富門者法皇嫡女、成人給、宣陽門者晚子、少年坐、然而依
 只隨棟範、鐘愛、御跡事大略被奉附屬、仍共難棄之、故人々相計歟、先不審事也、左府云、
 教訓也、奉仰、鐘有庭列、自中門外幔門敷筵道、先從僧、香爐筥以前、五位二
 部大夫盛俊、吉服、垂纓、不持笏、民部大夫貞元、次威・從、威在左、從在右也、自砌下退、
 諒闇裝束、持笏、六位二人、吉服、垂纓、不持笏、不昇堂上、御堂東面、中門在
 南、御所在、次誦衆三十人、僧都公胤、禪性、御前、次導師大僧正公顯、故院御灌頂、
 御堂北廂、幔門下々輿、執蓋至于東階、準人正清、定、吉服、卷纓、一一、吉服、卷、無言行道一
 通、可三通也、公顯依行步不叶之故歟、衆僧着座、六弟子在正面弘廂、不敷
 座、無堂童子、天台之例也、有度者、無申次儀、右中將伊輔朝臣、着椽袍、先例
 然而此人一門、九条民部卿以後、雖公卿着椽、近、中納言以下對座敷之、依間
 衛將闕腋、猶又用椽也、劍鞘有極、頗不相應事也、狹如無中間、強不可用此路
 歟、一行座之時如季御誦經、經公卿座前之例也、今日儀似、往古又有寶子之例
 無其便、可經寶子歟、隨時不可守株、往古又有寶子之例、跪藤大納言座前、經氣色之後、
 起入正面間、蹲導師左辺仰之、經公卿座前、可就導師右辺歟、經寶子、經本路退、有
 願文、草別当兼光卿、大、次藏人親俊、其袍色不分明、黑、於六位袍、取所々諷誦文、經讚
 衆兩座中間授、堂達退、乍立授之、可跪歟、又公家、次藏人敷公家御誦經使料円座於
 端座公卿座末、後間、度者使不進以、左少將隆保朝臣、椽袍、是先例、着円座、無申次
 者、御誦經使頭大藏卿宗、頃之起座退、頗遲退、不、說法之間、敷唱礼円座於正面廂
 頼朝臣奉闕白命催之云々、可然歟、、南北、遠江守行房、着位袍、依、上總守親長、椽袍、役之、為太早事畢、行導一通、
 導師着下座、持布施、左大臣取被物、判官代行房傳之、予又取被物、判官代
 勘解由次官清長傳之、大納言以下藏人傳之、人々猶取被物之間、予退出、事
 畢於中門辺給威・從各二人、六弟子布施、掃部寮敷筵道、還列如進儀、於近
 辺有監僧供云々、
 堂莊嚴、御堂初七、日之見記、
 本仏前香欄前、本僧座、奉懸、兩界曼荼羅、胎藏在南、智証、其前立壇張蓋、正面
 廂南間副東長押敷高麗帖一枚為導師座、迫南廂北柱敷高麗・紫帖為僧綱
 以下讚衆十五人座、同柱北方立經机、同廂迫南長押敷紫帖為十五人座、

其前立經机二行、座皆以東為上、摺写法華經卅部每机置之、金泥一部自上臚次第分置一卷、弘庇正面以南至于南中門廊敷上卿座、々末二個間對座敷之、法親王座南格子遣戸如元、雖為晴儀、不覆御簾、素服座如日来、以西中門南廊為衆僧集会所、

今朝天王寺宮親王、定惠、有御仏供養、有堂童子、公卿或束帶、或直衣、或布衣云々、有諷誦文、式部大輔敦綱草之、

仮治井宮有御仏事、有諷誦文、同人草之、

廿四日、備前守仲国行御仏事、御前僧等施車云々、

平大納言親宗、修御仏事、有諷誦文、大内記宗業草之、

廿五日、公家奉為故院於蓮華王院被行御齋会云々、伝聞、大宮大納言實宗、行事、

左衛門督通親、權中納言泰通、平中納言親宗、右衛門督隆房、別當兼光、

二位宰相雅長、左宰相中将實教、大宮權大夫光雅、六条三位經一、三位中

將公衡、參入、左中弁親經朝臣行事、左少弁宗隆、少納言親家、大外記師

直、大夫史隆職、広房等又參仕、又大炊頭師尚朝臣參入云々、堂莊嚴儀、正

面仏壇下立仏台、東廂同間、北第三間々別東西一行敷高麗帖各一枚敷母屋、依其程、疾

引重、為左方僧綱座、其北本、個間々別東西二行敷紫帖二帖為凡僧座、右方可

准知之、逼正面間立御經机、其東立行香、散花机、奇立目六、名香、枝、以

東孫廂北二個間為閑白座、南方為聽聞所、北方為休所、同孫廂南三個間敷公卿座、左方僧座

末懸御簾為素服座、以南子午廊為公卿參集、所脫也、其南卯酉廊為上官座、講師權僧

正兼覺、誦師法印良宴、御前、僧也、呪願前大僧正公頭、左方行事宗隆、右方行事親

經、雖為上臚、付公卿座方行之、今日事所奉行也、說法甚久、仍中間引布施、仍僧侶過半退出、不拘行

事弁命云々、素服人右大將頼実、毛車、民部卿經房、代車、左大弁定長、網、右中弁

棟範朝臣、右少弁資実等參入、各着素服、但大將不着之、閑白不被參、近年

大臣不參、此御齋会自然事歟、延久、土御門右府被參、右大將頼実、被修御仏事、有諷誦文、大学頭在茂草之、

廿九日、有八条院御仏事、有願文、

御室御弟子宮道法、親王、有御仏事、有諷誦、

前齋院有御仏事、等身普賢、法花經十二部之、有諷誦、右大將頼実、加署云々、

民部卿經一、修御仏事、有諷誦、大内記宗業草之、

五月

一日、鎌倉前右大將頼朝、被修御仏事、有諷誦文、

二日、癸酉、法皇七々御仏事也、雖為復日、依有例所被行也、或又憚之、先

日自旧院被尋、予一一、午剋着束帶參入、公卿已着堂前、頃之從僧引列、次

衆僧六十口、參上、七僧着欄中座、講師法印澄憲、誦師法印雅縁、呪願法印良宴、

縁上、三礼法印実全、願、呪師權大僧都弁暁、散花權律師仙雲、堂達已講聖覺、

法服今朝送遣之、經院藏人一一為使云々、次僧綱、凡僧分着左右方、威儀師着左方凡僧座、講、誦師

着礼盤、諸僧惣礼、兩師登高座、堂達打磬、願、呪師發音、堂童子着座、法親王

也、左方遠江守行房、上総介親長、備中守頭經、右方侍從清信、少納言親

家、侍從有通、賦花管、左方上臚引呪願、右方上臚引三礼、堂達、散花師進立仏前散花、行道、次威

儀師、次左方僧、呪願、僧綱、凡僧、次右方僧、三礼、堂達、僧綱、凡僧、

經公卿座前、一一、散花師於本座申対揚、講師表白、堂達拔取願文、挿鳥

寄行香机、草式部大輔光範、内御侍誦、清書別當、右大臣兼雅公加署、左大臣実房公為上臚、然而執事歟、右大臣賜素服人也、如元立杖跪、高座右辺授

講師復座、講師誦願文、堂達授旧院諷誦文、草光範、朝臣、於講師、復座打磬、又打鐘、

堂達不仰之、又、堂達返取諷誦文、經講師後左辺昇欄中、是呪願復座、又

所々諷誦文於講師復座、不打磬、又不打鐘、講師仰可仰之由、然而不打之、

呪願如前、今日無度者、御誦經使、楊經題金泥五部大乘經、素紙法華經六十

部・同四卷經一部・同一日經法華經一部等也、仏像等身尺迦三尊、平生之時、

奉為沒後御追善所被造立也、說法畢、両師着本座、有行香・呪願、三礼起座、

廻後戸着礼盤、威儀師經行香机西北、跪東頭賦輪、左大臣・予・藤大納言・

大宮大納言・新大納言・左衛門督・權中納言・平中納言列之、藏人親俊取火

蛇行香机東、威儀師立左方堂童子座上、其次左大臣以下至左衛門督親王座簾

前、為復彼座列之、一一、次返輪復座、左大臣、一一、作片輪、如何、

御仏名為片輪、予云、法成寺八講又為片輪、但件儀者、先作輪、無復輪、異

仏名、一一、引七僧布施依臆次引之、講師被物十重・裹物等、呪願以下一重・

一裹、次左方僧綱、次右方僧綱、次左右方凡僧、皆一重僧綱綾、凡僧平綱、一裹、

凡僧紙裹、左大臣以下取之、右大臣以下素服人臨時皆相加取之着座、藤中納

言不着之、公卿皆取左方僧綱、仍右方僧綱以下殿上人取之、四位取被物、五

位取裹物、此間從僧撤香爐、一一、御前僧等猶留候、公卿左府以下多以退出、

民部卿申右府云、御前僧不改裝束行例時結願、如何、右府云、尤可然者、但

御前僧・今日僧衆如何、戸部云、皆候此内者、預承仕等撤高座・礼盤・行

香・散花机等、此間予退出、

仏經事、供養畢各返給之、本所分被送運華王院云々、一周忌間可留候僧事、六口、其内、

女院宮々令渡他所給并御車事、

殷富門院尋常時廂御車令渡泰經卿、御重服時可被用檳榔毛車敷、

宣陽門院同廂御車渡御乳母家、是又可被用毛車敷、

前齋院被用勅別当右大将頼実卿檳榔毛車、懸青簾、表下簾

前齋宮、

法眼定勝・定康法師修御仏事、

九日、右府云、故院牛童有十一人、殷富・宣陽門院等并前齋院獻之、於御廐

舎人者、皆被付後院也者、

十一日、左大弁定長、來、黒染生狩衣、同白張練奴袴、

十三日、甲申、陰陽不定、今日故院御月忌、先例折日次、或中陰之中被始行

之、今度今日始之、申日有例云々、予依小忌不參、翌日民部卿經房、示送云、

右府以下公卿廿人祇候、宮々有御諷誦、堂童子二人、親長、經高、次実慶僧

正奉仕御仏事、次例時、次前齋院被行御月忌、

十四日、法皇中陰以後去二日滿七々、有政始云々、伝聞、改平座立倚子・床子等

也、一一、無所々出立、

十五日、行幸鳥羽、依御方違也、依諒闇無鈴奏、無警蹕、無立楽、無大殿祭、

人々不追前云々、

十六日、參関白大炊御門富小路、関白諒闇直衣、立烏帽、彫骨扇、縹村濃紙、散薄、

廿三日、被行春季仁王会、去三月四日予定申日時・僧名、而十三日法皇崩御、

仍延引、去二日七々忌景満畢、昨日檢校平中納言親宗、參陣、改勘日時補闕

請云々、未始剋參内ヒシハシシコト、関院、前軀四人、盛房外不着諒闇裝束、甚為ナシ、右大将頼実卿・右中

弁棟範朝臣賜故院素服之人也、去日被下除服宣旨、今日裝束常諒闇裝束也、

大将隨身追前如恒、着鈍色袴・劍并壺裝束、革用有文如恒、

六月

八日、民部卿經房、被來、未被除故院御服、可着黒染狩衣・奴袴白帷、於除

服宣旨者去比被下了、先日示合日除服了、參旧院之時、猶可着黒染敷、將不

除之、從公事之時、可着諒闇裝束敷、予答云、前義可宜、若奉行神事之時、

被申不除服之由無憚敷、先今日被命云、申合左府、返答同、予存義也者、

十三日、関白御消息ソク云、諒闇之間、被仰音奏後発前声者定例也、而行幸之時、

停止警蹕アキマ、然而前声、因之無可止理敷、所謂神社行幸是也、依諒闇可止

者、他時不可筵、道理之致如此、而保元、大將以下諸卿皆止前声云々、前例歟、今案歟、彼時之沙汰定令覺悟歟、大將參入、得問迷是非、可被示給者、予申云、他時筵前声人、至于行幸之時不可止歟、至于保元度沙汰者不承、只人可止之由存知歟云々、

今月故院御月忌也、尊勝執行濟舜修御仏事、又八幡別当成清進引物、

十四日、今曉行幸大内、是祇園御靈会神輿可令過閑院北陣給、仍所幸大内也、

抑蘆簾可被渡閑院、御簾不再調之故也、而寸法不叶、大内暫不可有御逗留、

因之今夕可還御也、

十六日、今日被始後院庁云々、伝聞、立輻於朱雀云々、

廿日、内裏御馬御覽云々、今夜依秋節御方違行幸大内、神祇伯仲資王着吉服、

依為神司不着諒闇裝束云々、

七月

三日、今日法勝寺御八講始也、法皇崩御之後、自今年為公家御沙汰也、仍昨日於陣有僧名定云々、

十三日、今日故院御月忌也、一品經供養、有願文、左大臣不取布施、

十四日、民部卿經房、示送云、近曾請取勸修寺長者文書、来十八日可定、八

講非神事、家主以下着諒闇、尤不可憚歟、又右中弁定經朝臣雖為神事候其座、

不可及沙汰歟、予答云、諒闇裝束不可憚、右中弁着座又不可憚、氏寺事異他、

神今食齋中執政不被法成寺八講、況於定座哉、又五色水共被止之、何事之有

哉、又同人先日示被送云、故院御筵前齋院自今年可被行歟、引見先規之処、

承平以後至于治承、一暮之中被供之例多其數、而十四日・十五日凶会・欠日、

共以不快、先例或憚、日比不憚、若一暮以後多有此事、一一、

十八日、奉為故院御追善被立御堂於鳥羽、旧院沙汰也、

廿二日、左大將良經、産五夜也、伝聞、有朗詠・攤等云々、

廿四日、左大將産七夜也、伝聞、閑白直衣、吉服也、次、着吉服束帶、一一、朗詠催馬楽、右衛門

督隆房、唱之、依諒闇無管弦、有攤、

八月

十一日、尾張守忠明今日着始諒闇裝束布衣、無官之時不被沙汰、新任吏皆着

之、棟範兼遠江守、又広房任河内守、皆着之、

十四日、有石清水修造・弥勒寺金堂火事定、秉燭參内、着諒闇裝束、先日左

送云、為八幡定吉服歟、為諒闇歟、先例未及見、神宮御卜上卿着諒闇、不可過件事歟者、予答所命有理之由、

廿一日、左大弁定長来、雖除故院御服、猶着黑裝束、

廿四日、自今日被始最勝講、去五月延引、左大臣以下參入云々、

廿六日、諒闇中有無例有沙汰、

九月

一日、金光院八講終也、午剋着直衣參向、依為諒闇不垂半部、公卿右大臣、

黒染直衣、故院御服也、尾張守忠明今日初參、先日禪門仰云、可着布衣、雖諒闇、少年

者用染色衣可宜者、仍着諒闇狩衣、不縫手本、黄青裏、生衣白縫結、又指貫鈍色、結一筋、但垂之、单文、濃蘇芳、

生单衣紅、下袴淺黄、彫骨扇等也、抑当国未神拜、又募成功修造吉田社、仍

可着吉服否尋問之、

大炊頭師尚朝臣云、

神社造営国可着諒闇裝束否事、先規不分明、可停止美服之由被宣下、世

間上下着鈍色、世以之号諒闇裝束、殊神事之時、暫脱之從事、即又如元

着之、然者非重事歟、以管国司等依造営宇佐宮、不着諒闇云々、此条強

不可然歟、未神拜国司着諒闇云々、又役夫工等弁朝經着青鈍之由見旧記、

又伊勢事御卜上卿被諒闇、(着脱力)但延久役夫工之時、行事弁隆房朝臣着吉服

云々、當時役夫工上卿・弁又着吉服、敬神之趣、末代殊甚、然者不令着諒闇、何事候乎者、

師直曰、

111、諒闇裝束者、心喪色云々、天下文武諸司雖着之、從神事之日者、改着吉服定例也、

二日、藤中納言定能、被入來、猶着故院御服、黑染狩衣・奴袴白帷也、被示曰、依宣旨除服了、然而猶參旧院并向他所如此、故中御門右府被着堀川院御服之時、所為如此、但着諒闇裝束参旧院無憚、故右府元三参所々、又被参旧院計之、着諒闇被参歟、

十三日、依故院御月忌午剋参六条殿、着直衣於楊梅東洞院止警蹕、111、右大將以下取布施、導師一重・一裹、絹裹、題名僧雖僧綱、皆賜紙裹各一、例時之間退出、

参入公卿

予、右大將、頼美、黑染直衣、備(従力)公事之時被着諒闇、

以下或束帶、或直衣、

十月

六日、可奉行太神宮文書、仍所請取文書也、前伯耆守盛房着諒闇衣冠、合目六請取之、

廿三日、有神宮御卜四个条、申剋参内、着亮闇裝束、1、官・寮、官神祇大副兼友朝臣以下七人皆着吉服、陰陽助濟憲朝臣以下四人、有親一人着諒闇、其外皆吉服、

廿五日、秋除目始之、法皇崩御之後、去七月十二日被任闕国等、其後任寮官初度也、

廿九日、被發遣伊勢奉幣、内宮御鑲洪周不被開事、高欄居玉落了、(事)怪異重暈、天變等事被申也、早旦沐浴、着束帶吉服、前、参内、中宮權亮忠季、來逢陣中取裾、彼朝臣着諒闇裝束、然而不憚之、以下、弁・外記・史・職事皆着吉服、依諒闇無御拜、然而南殿儲御座、幣立之間、主上着吉御直衣御西小御所、向巽方有祈請云々、件御所北面本自懸尋常簾、南面中有、懸蘆也、

十一月

九日、殷富門院御出家、於法金剛院新御堂有此事、

十四日、民部卿、經1、着吉服布衣、其後降陣、故院御服猶一年、可着黑色云々、而予奉神宮上卿之旨依有憚之、

十六日、今日初有粟田宮祭事、

十九日、今日大原野祭也、予依諒闇不奉幣、抑民部卿給故院素服、依宣旨除服、猶着黑染参内・院并向私所、仍内心有恐、不可昇棚、又奉幣之由、昨日所示送也、

廿日、藏人頭宗頼朝臣伝闕白命云、明春任寬德例於御前始可被行除目、而諒闇之条被問先例之処、外記勘申旨如此、此中仁和例足佳模、可被准拠哉、但寬德亦過中陰四月被行云々、今度諒闇以後被行之条、亦何樣可候哉、且依吉例之差別、且隨時宜之用捨、可有有所為哉、所詮仁和例雖諒闇於御前行之、而寬德中陰(後)例大祓已後被行之、用捨之間、可許申、

大外記師直勘申

一、諒闇中初度御前儀除目例

寬弘八年十二月十七日、始有京官除目事、去月廿四日、冷泉院御事、

寬德二年四月廿四日、今日除目始、去正月十八日、後朱雀院御事、

今案、凡諒闇中正始被行御前議除目例所見不詳、

一、同除目被仰旧院御給例

寬弘八年十二月十九日、被行京官除目、掃部助藤原公澄、〔冷泉院前齋院御給〕

寬德二年四月廿四日、被行京官召除目、尾張守從五位上藤原公基、〔右方〕後朱雀院判官代、
〔左方〕如元、將

一、諒闇中三月除目例

天曆八年三月十四日、除目也、〔去正月四日依母后御事延引〕

今度拔出叙位事所見不詳、

一、諒闇年内大祓後除目被行拔出叙位例

天曆元年二月、除目始也、〔去正月廿七日諒闇之由大祓也〕

今度被行拔出叙位、

永承元年二月七日、除目始也、〔去月廿五日諒闇之由大祓也〕

今度被行拔出叙位、

一、三月除目御前儀例

治曆元年三月廿七日、除目也、〔去正月女御事、〕

嘉承元年三月八日、除目始也、〔依幼主御業事延引、〕

一、前大炊頭師尚勘申

一、幼主成人〔復〕禊後、初度御前儀叙位・除目当諒闇時、先例不分明、

一、成人繼體時当諒闇例

宇多天皇

仁和三年八月廿二日、〔六〕踐祚、今日光孝天皇有故、

十一月十二日、〔五〕御即位叙位、

同四年二月七日、除目始、

冷泉院

康保四年五月廿五日、踐祚、今日村上天皇有故、

七月廿三日、有臨時小除目、不着議所於左仗被行之、

九月四日、立昌子内親王為皇后、仍右大臣參御前、有官司除目、

安和元年正月十日、除目始也、諸卿參御前、執筆右大臣、〔左大臣、小一条〕

後冷泉院

寬德二年正月十六日、受禪、十八日、後朱雀院有故、

三月廿六日、於御前有坊官賞除目、

四月六日、御即位叙位、

廿四日、被始行除目、

一、初御前議先被行叙位例

円融院

天祿三年正月三日、御元服、

天延元年正月六日、叙位、初於御前行之、

廿二日、除目始也、初於御前行之、

鳥羽院

天永四年正月一日、御元服、

永久二年正月五日、叙位、初於御前行之、

廿日、除目始也、初於御前行之、

崇徳院

大治四年正月一日、御元服、

同五年正月六日、叙位、於御前初度被行之、

廿六日、除目初之、於御前初被行之、

近衛院

久安六年正月四日、御元服、

仁平元年正月六日、叙位也、初於御前被行之、

廿七日、除目始也、於御前被行之、

一、初御前儀日京官除目被行例

朱雀院

承平七年正月四日、御元服、

天曆四年〔十一〕五月廿七日、京官除目始之、初御前行之、

同六年正月五日、叙位、初於御前行之、〔十二〕去年叙位停止、

一条院

永祚二年正月五日、御元服、

正曆四年七月八日、除目、初於御前行之、

十一月十二日、朔旦叙位、於御前行之、

一、県召除目四月被行例

寛徳二年正月十六日、後冷泉四月廿四日被行県召除目、但去三月於御前

被行坊官賞除目、

一、十五歳以後御前儀叙位・除目例

朱雀院

承平七年正月四日、御元服、〔十三〕御年十五、

天慶四年十二月十七日、京官除目始也、於御前行之、〔十四〕御年十九、

同六年正月五日、叙位、初於御前行之、去年叙位停止、

円融院

天祿三年正月三日、御元服、〔十五〕御年十四、

天延元年正月六日、叙位、初於御前行之、〔十六〕御年十五、

廿二日、除目始之、於御前初被行之、

初度御前儀叙位除目被載故者給例

〔十八〕前行行頭二條ルカ
一、朱雀院

天慶四年十二月十七日、除目、〔十九〕初御前儀也、

越前權大目物部実如、〔二十〕故中納言橘朝臣、〔二十一〕去天慶二年給、

円融院

天延元年正月廿八日、除目、〔二十二〕初御前儀也、

常陸大目雀部良義、〔二十三〕故大納言源朝臣、〔二十四〕元慶二年給、

越中介溥理雅秀、〔二十五〕故修子内親王、〔二十六〕仁安二年給、

太宰大監藤原次廉、〔二十七〕故太政大臣、〔二十八〕後家申、

後朱雀院

長元九年七月十四日、御即位、〔二十九〕去四月十七日受禪、〔三十〕件日後一条院有故、

從五位下藤原俊経、〔三十一〕後一条院御給、〔三十二〕式部、

今度先被行坊官賞除目了、然而叙位初度也、

後冷泉院

寛徳二年四月六日、御即位叙位、〔三十三〕去正月十六日受禪、〔三十四〕同十八日後朱雀院有故、

從五位下平定家、〔三十五〕後朱雀院判官代、

今度先被行坊官賞除目了、然而叙位初度也、

崇徳院

大治五年正月廿六日、除目、〔三十六〕初度御前、〔三十七〕去年七月七日白川院御事、

右馬允源遠貞、〔三十八〕白川院武者、〔三十九〕所、〔四十〕下名加、

予申云、明春除目事、諒闇中初度御前儀、准仁和佳例明年正月可被行歟、寛

德及四月者、中陰間不被行諸事之歟、(故脱カ)尋、例不憚諒闇年、強可過一暮哉、依諒闇無五節、但新嘗会以前猶為神事、

廿二日、今日二品於法花堂奉為故院被供養一切經、法印澄憲為御導師、題名僧廿口、右大臣兼雅被坐簾中、藤中納言定能、已下十余人着座、布施導師被物十重・裏物一・錦三段・唐物十五段・長絹十五疋・綾十五疋已下也、題名僧一重・一裹、願文、

(廿二日以下九字、底本前行二統クモ意ヲ以テ改行ス)
廿二日、辛卯、新嘗会也、

廿三日、依諒闇無五節、

十二月

五日、中将嫡子小童年五才、加首服、又有着袴事、一一一、予衣冠、于時諒闇也、

仍存最蜜儀、一一、不居所々饗、無理髮祿、

九日、右衛門督隆房、被示送云、今日奏御祈御卜、可着吉服歟、答云、神宮御卜上卿不着吉服、不可改諒闇裝束者、

卅日、伝奏(開カ)、追儼、別当兼光、左大弁定長、參仕、

建久四年

正月

一日、己巳、朝間晴、牛後陰、不出行、依諒闇無節会・小朝拜、有平座、不奏見參、大宮權大夫光雅、左宰相実教、參陣、有三猷、関白無拜礼云々、

七日、依諒闇無節会、又依非節日無平座、外記參関白直廬、申御弓奏候之由付内侍所、件奏候之由、上卿可奏聞不見之由外記申、然而嘉承、外記直申云々、

仍平中納言親宗、雖參内退出云々、

八日、依主上御疮瘡御祈、於禁裏閑院、被始行七仏藥師法、依諒闇不可有音

樂、先例一度舞、幽玄也、天人代奏云々、本云、

廿六日、今日被始行除目御初度儀也、(行)主上御、年十四、今朝於昼御座先覽吉書、是又成人儀初度也、左中弁親經朝臣・藏人頭宗頼朝臣等奏之、一一、依初度除目相扶所勞自近辺可參也、

関白并左大臣・予着御前座、雖為諒闇掃部寮數尋常帖、是保元例也、安元、敷鈍色、一一、略之、

今度初度除目当諒闇無例、寬德、先三月被行坊官除目、四月被行梟召除目、諒闇初度除目仁和・寬德云々、

今度、外記持来関官帳・叙位十年勞帳者、依諒闇去五日不被行叙位故也、

廿八日、今日除目入眼也、一一一、依諒闇先可有叙位也、其次第先召統紙、

二月

五日、壬寅、有故院周忌御法事定云々、伝聞、於旧院殿上有此事、敷帖許、無台盤、七々之後撤之、雖被相尋紛失云々、右中弁棟範朝臣於横敷書定文、

御法事可被供養蓮華王院新御堂、白川院御法事被供養蓮華藏院九体阿弥陀堂、依彼例書新御堂供養并御法事云々、

右大臣兼雅、右大將頼実、左衛門督通親、坊門中納言親信、民部卿經房、平中納言親宗、別当兼光、左大弁定長、參仕云々、

七日、於法勝寺講堂有尊勝陀羅尼供養事、法皇崩御之後、為公家御沙汰於禁裏被行也、

十三日、公家被定故院周関御齋会事、於旧院有御正日定云々、

三月

三日、故院周関御法事日可被奉供養新御堂、在蓮花王院本堂西南、有御裝束始、又被奉居

御仏、右大臣・民部卿經一、左大弁定長、參入云々、

九日、丙子、陰晴不定、故院周忌御仏事也、被供養蓮花王院新御堂、殷富門院・前齋院去夜令入御、宣陽門院今曉入御、被申内殿上人云々、予為太神宮

上卿、仍不參、一一一、午剋事始、関白、右大臣、兼雅、右大將、頼実、左衛門

院・前齋院去夜令入御、宣陽門院今曉入御、被申内殿上人云々、予為太神宮上卿、仍不參、一一一、午剋事始、関白、右大臣、兼雅、右大將、頼実、左衛門

督、通親、右衛門督、隆房、別当、兼光、源中納言、通資、二位宰相、雅長、左宰相中將、実教、大宮權大夫、光雅、藤宰相中將、公時、左大弁、定長、右宰相中將、成経、六条宰相中將、公繼、花山院三位中將、忠経、前大藏卿、泰経、藤三位、雅隆、右京大夫、季能、前宮内卿、季経、六条三位、経家、修理大夫、定輔、大藏卿、親雅、
賜素服之人也、依宣旨雖除服、今日皆着黒、染束帶、從公事之時者、日來着諒闇裝束也、

堂童子左方前遠江守行房、右兵衛佐親兼、備中守頭経、少納言能資、右方侍從清信、少納言親家、左衛門佐親実、紀伊守経高、講師法印權僧正覚憲、
山階寺別当、誦師法印澄憲、故院中陰例時僧、呪願權僧正勝憲、東寺、堂達已講聖覚、故院中陰例時僧、 散花・三札可尋、百僧外七僧也、自東門引列、殷富門院、前齋院各有加布施云々、

被行勸賞、

右馬允藤原義朝 故院武者所也、去春除目雖可被任、初度御前儀有憚、今日被任也、

美濃掾一一

正五位下源仲国 造国司、備前守也、

法橋覚尊 仏事、法印院尊諱、

十五日、壬午、被行諒闇大被云々、

一、八幡臨時祭事

去年三月十三日法皇崩、仍無臨時祭、今月又依御忌月不可被行、二个度停止無先例、三月有障之時、四月行之例也、多是賀茂祭以後也、以前例又有一兩、師尚・師直・良業等所勘申也、兼又自明年以何月可被行哉、二条院母儀御国忌六月也、而祇園臨時祭被行之、若可准哉、三月有故、四月行之、然而諒闇十三个月内、籠事強四月不可被行歟、天曆八年正月四日母后崩、射礼・賭弓九年不被行之、自十年以三月被行之、年中例事・神事其事雖異、

何不准扱哉、自明年以二月可被行歟、四月之例雖多、臨時事依難縮、及四月歟、可為每年之事、於四月者、賀茂祭之外無他當可宜歟、二条院御時、祇園臨時祭召使宣命之許也、至石清水者覽片舞可有其憚歟、

一、射礼・賭弓事

正月依御忌月、当代三月可被行之由被定了、而今又三月為御忌月、可被行哉、良業所勘申趣、淳和天皇御宇、母后御国忌五月四日也、五日武德殿節依近其日、他月行之、被憚御忌月歟、而淳和天皇又五月八日崩、仁明天皇為叔父着素服可令諒闇、依父子礼也、然而五月節如旧、依非実子、無忌月儀歟、今度雖為祖父、依恩深、任仁明天皇例有諒闇儀、然而三月御忌月不可被憚歟、
不注勘文詞、取心注也、

申云、天曆、正月為御忌月、以三月行之者、非憚二月、漢家例三月行礼之由見勘文、就之三月被行歟、其後正月當御忌月者、後冷泉院・後三条院・鳥羽院・先帝・当今等也、是依天曆例三月所被行歟、而今三月又為御忌月、以二月行之、何妨之有哉、隨二月觀大射之由載良業勘文歟、御忌月者、自天曆母后御時出来事云々、淳和者、依近其日止之、国忌者四日也、節者五日也、以之難御忌月、又仁明者、其月武射、偏依非実父之儀行之、被破忌月之条不分明、仍天曆以前樣、忌月事不審者也、所存、有諒闇無忌月之条如何、猶二月被行之可宜歟、頭弁云、良業云、天下三个度不可有忌月、仍任仁明天皇例、今度不可有御忌月歟、正月高倉院・三月故院也、七条院當時御座、遂可有其儀之故云々、予申云、仁明天皇依淳和崩有諒闇、其後嵯峨天皇崩、又有諒闇、而母后者、仁明御宇不崩、彼御宇崩御者、爭無諒闇、理之所至、一代可有諒闇三个度也、然者又忌月何無三个度哉、但當時此沙汰無便事歟、

本云、
自余条々非諒闇沙汰、仍不抄之、

実冬卿記于時藏
人頭

文永九年二月十七日、天晴、卯剋太上法皇於寿量院令崩給、御年五十三、自昨日不被仰言語云々、

卅日、戊午、天晴、早且着直衣参内、今日可有渡御倚廬也、仍戊剋着束帶、

帶劍、時繪野、自直廬参御所、已下、仍出御、御引直衣、台盤所西向妻戸兼供筵道、

不供、予取御草鞋簾下、関白衣冠、候御簾、中院宰相中将具房、参進取御劍、

予進御草鞋、二条宰相中将、取璽、予前行取脂燭、今夜事藏人頭、頼親朝臣、

経頼・定藤、經皇后宮御方・昼御座前入御倚廬、吉方癸方、以皇后宮御方西對為

寮等奉仕之、板敷等、令地下去地一尺許也、御草鞋乍令着給入御々帳下、中院宰相中将先入置御劍、入

御忿退出、仍打落灯台云々、予取御鞋給藏人了、二条宰相中将置璽歎、大閣

令尋給、頼親朝臣召泰盛、御衣以下進入間方角被向、先例不明之由申也、

御冠、繩纓、白土高坏上置柳筥云々、上、於倚廬殿上出納俊秀伝藏人兼任、々々伝予、々

取之参進、先撤壺并弓、置御前、入々、頼親朝臣取御装束参進、次又召公貫朝

臣、撤弓・壺、帶劍、取笏、御装束了兩人退出、藏人兼任取御衣参入、次令脱錫

紵給、兩人役之、次予・頼親朝臣廻本殿々々上、六位二人取脂燭、公卿新大納

言上、兼、左衛門督師親、宰相中将具房、二条宰相中将経良、等自本在本

殿々上、出無明門向北陣、六位二人取、新大納言可為高倉面北門歎云々、建久、

閑院之儀於西洞院面北門有此事、被准抛歎、頭亮云、可為北門云々、予・頼

親朝臣・公秋朝臣・公貫朝臣・実盛・在匡・経長朝臣、六位兼任・仲頼・行

泰・行一、在賢・成房也、公卿列立北門西腋、東上北面、陣官取松明在前、

予経列後加末、但頗立入也、藏人等取素服次第二与公卿、作入折櫃可持参歎、貫

首素服藏人持参也、予極臆兼任持参、予召瀧口永連令引直、或出納役之、頭

亮出納一職役之、雲客等出納持参、藏人指脂燭前行、公卿着倚廬殿上、了起

座着陣、上卿以下着奥座、須陣官了予以下於倚廬殿上脱、畢以主殿司給出

納、々々給小舍人、畢小舍人頼弘書銘、折紙、次女房着素服於門外、公秋朝臣

扶持之、敷筵道也、次御膳畢、次居殿上台盤云々、予退出、

今日事世成不審条々

泰盛朝臣勘申日時事、

在匡朝臣着素服事、御師読着素服事有様事歎、更無如此例、

陣座板敷以下事、

乍入素服内不出仕人々

皇后宮大夫 公永朝臣

師行朝臣

左衛門督着心喪服、今又着吉服参入、雖有建久例、為巨難歎云々、

(識語②・③あり)

一、内舍人、

一、主典、主鈴、典鑑、

一、中宮職、図書寮、縫殿寮、内匠、

一、式部省、治部、雅楽、諸陵、民部、主計、兵部、

大藏、織部司、宮内、木工寮、大炊、掃部、造酒司、彈正台、

東宮傳、春宮坊、主膳監、主殿署、齋宮寮、齋院司、施薬院、大宰府、帥有時

式、帥二ハ大中納言成也、大

一、御外祖父

内舍人橘清友 仁明天皇御外祖父、

参儀橘奈良丸 内外祖父、

権中納言藤長良 陽成院御外祖父

権大納言藤能信 白河院

権中納言藤長実 近衛院

大納言藤経実 二条院

兵部権大輔平時信 高倉院、贈從一位左大臣、

從二位藤範季 順徳院

参議源通宗 後嵯峨院

太政大臣藤実氏 後深草院

同上 龜山院 左大臣藤実雄 後宇多院

同上 伏見院 参議藤経氏 後伏見院

太政大臣源基具 後二条院

左大臣藤実雄 花園院

参議藤忠継 後醍醐院

左大臣藤公衡 光嚴院

内大臣公秀 本院

同上、後光嚴院、藤兼継 新院

一、追号天皇

草壁皇子 号長良天皇、又長岡天皇、中、天武二子、文武父、

舍人親王 号崇道、敬天、文武二子、文武父、

施基皇子 号田原天皇、天、智三子、光仁父、

早良親王 号崇道天皇、光仁二子、

一、中書王、前中書王、延喜帝御子、後中書王、村上

一、被殺帝 安康 允恭二子、為眉輪王被殺、

仁賢 為真鳥大 臣被殺、 崇峻 欽明十四子、為馬子大臣被殺、

安德 為源氏 入海、

一、被廢帝 淡路廢帝 淡路國、

崇徳院 讚岐國、 後鳥羽院 隱岐國、

土御門院 阿波國、 順徳院 佐渡國、

一、名譽親王

厩戸 春宮、聖德太子、用明子、 施基 天智三子、

草壁 春宮、文 舍人 文武子、 大津

道祖 春宮、天 他戸 春宮、光 智孫、 早良 春宮、光 仲野 高岳 春宮、平 阿保 平城子、 恒 春宮、

恒貞 春宮、淳 惟喬 号小野宮親王、文徳子、 貞保 式部

元良 陽成子、兵 敦実 春宮、延 部卿親王、 喜子、 慶頼 春宮、保

重明 為平 具平 号六条宮、 天曆子、 敦道

敦平 師明 実仁 春宮、後 三條、 轉仁

重仁 惟明 雅成 頼仁 宗尊 後嵯峨子、中務親王、

一、延喜三光

保光 桃園中 重光 致仕大 納言、 延光 枇杷大 納言、

一、一条院四納言

藤齊信 太政大臣相光子、師輔子、

藤公任 関白頼忠子、小野宮殿孫、

源俊賢 高明朝臣子、延喜帝孫、 藤行成 義孝少將子、伊尹孫、
一、賜諡号大臣

淡海公 内大臣、鎌足子不比等、右大臣、贈太政大臣、

忠仁公 冬嗣公二男良房、太政大臣、申染殿、太

照宣公 長良男基経、太政大臣、号堀川殿、

貞信公 照宣公四男忠平、太政大臣、申小一条殿、

清慎公 貞信公一男実頼、太政大臣、申小野宮殿、

謙徳公 右大臣師輔一男伊尹、太政大臣、申一条殿、

忠義公 師輔二男兼通、太政大臣、申堀川殿、

広義公 清慎公二男頼忠、太政大臣、号三条殿、

恒徳公 師輔子相光、太政大臣、号法住寺殿、

仁義公 師輔子公季、太政大臣、号閑院、



